

第41回 南北海道考古学情報交換会inせたな（2020.12.5）

『道南日本海側の続縄文時代を学ぶ～南川遺跡の出土遺物から～』

ユベオッ（続縄文）時代の概説

佐藤 剛（（公財）北海道埋蔵文化財センター 和人の研究者）

1.はじめに

本講演では、当該地域について、アイヌ民族が先住民族であることから、引用と固有名詞を除き、ヤウンモシリ（田村すず子1996、【名】[ya-un-mosir陸・の・国]北海道。方言：沙流。{E: refers to Hokkaido.}《テープ》）（註1）島及び周辺諸島（以下、ヤウンモシリ島）を用いる（佐藤2020a・b）。また、「続縄文文化」と「続縄文時代」については、後述する検討により、検討後に「ユベオッ（続縄文）文化」と「ユベオッ（続縄文）時代」と呼び変える。

続縄文時代研究の現在は、近年では、2007年と2008年に北海道考古学会による研究大会が開催されまとめられている。2007年は北海道考古学研究大会「続縄文時代研究の現在」が開催され、辻秀人氏が「続縄文文化と弥生・古墳文化を考える」として基調講演を行い、私は「続縄文土器」、酒井秀治氏は「石器」、松田宏介氏は「遺構」、福田正宏氏は「極東ロシアからみた続縄文文化とオホーツク文化」のそれぞれの研究状況をまとめ、検討した（北海道考古学会編2007）。その成果は、2008年の学会誌「北海道考古学」で研究会担当により紹介されている（北海道考古学研究会担当2008）。また、2008年は「続縄文文化とは何か」が開催され、石川日出志氏が「続縄文文化と弥生文化-鉄器を中心として-」として基調講演を行い、鈴木信氏は「鉄器・石器・渡海交易の関係」、高倉純氏は「石器群の変遷と鉄器化との関連」、福井淳一氏は「骨角器からみた続縄文文化の様相」、高橋健氏は「骨角器：鈎頭」のそれぞれの研究状況をまとめ、検討した（北海道考古学会編2008）。その成果は、2009年の学会誌「北海道考古学」で研究会担当により紹介されている（北海道考古学研究会担当2009）。また、これらのシンポジウムに基づいて、2010年には『北海道考古学』にて、「続縄文文化の特色」として特集が企画され（北海道考古学会編2010）、熊木俊朗氏は、関わった2008年の研究大会を振り返り、総論として研究の現状を概観した（熊木2010）。2014年には北海道考古学会誌において、「『北海道考古学』第50輯記念特集号」が組まれ、「特集：北海道考古学の回顧と展望」として、松田宏介氏により、続縄文時代の続縄文研究の進展と課題の整理が行われた（松田2014）。その後も多くの研究成果があり、課題も多岐にわたってきている。

そのため、主に「続縄文時代研究の現在」以降の研究の現状を概観することで概説とし、南川遺跡出土の遺構と遺物を考える一助としていきたい。概説のため、各研究者の引用が多く、十分に検討しきれていない内容もあるが、続縄文文化の総体はこれらの研究によっていることを明記する。また、本講演は、今回のテーマと筆者の力量により、続縄文時代の前半期の島南西部地域を中心として行う。島東北部地域の続縄文文化と「オホーツク文化」、「北大式」についてはほとんど触れることができないことから、島東北部地域の続縄文とオホーツク文化は熊木俊朗氏による検討（熊木2018）と、北大式は榊田朋広氏による検討（榊田2016）があり、参考としていただきたい。なお、概説で引用し検討した各氏に

よる引用文献では、原本に直接あたっていないものがあるため、それらについては各自でご確認いただきたい。

II. 続縄文時代研究の現在

北海道考古学会での一連の研究大会とその成果以降にまとめられた論考を中心として、個別研究の現状をまとめる。

1. 続縄文土器について

ヤウンモシリ島内での続縄文土器については地域研究が盛んである。熊木俊朗氏は道東部地域の在出土器について、地域的な変容を継続的に検討した（熊木2018など）。松田宏介氏は個別資料について、地域に根差した独自の視点から日高地方の続縄文時代前半期の在出土器や道内出土の古式土師器を検討した（松田2005・2006など）。大坂拓氏は東北地域北部の弥生時代と、それに併行する続縄文時代前半期の南西部地域から中部地域で論を展開した（大坂2007・2010・2015など）。私も中部地域における、主に辻秀人氏による土器様式（辻2005）での検討をもとに、ヤウンモシリ島と本州島との関係を追求している（佐藤2011など）。

本州島では、主に東北の当該期の土器と続縄文土器との並行関係が追及され、広域編年では斎野裕彦氏の東北の弥生文化を研究する立場（斎野2011）と藤沢敦氏の東北の古墳文化を研究する立場（藤沢2018）からの言及がある。また、赤塚次郎氏による弥生時代と古墳時代の両時代の境界域の土器様式を検討してきた成果（赤塚2002）があり、直接の言及はないものの、東北の弥生文化と古墳文化をつなぐ広域編年研究に大きな影響を与えていると考える。

続縄文土器の前半期については、鈴木信氏（鈴木2003・2011a・2018）と大坂拓氏（大坂2007・2010・2013・2015）による一連の検討と、広域編年からの斎野裕彦氏（斎野2011）と藤沢敦氏（藤沢2018）の言及があり、それらについて私の見解をまとめた（佐藤n.d.a）。そのため、南西部地域に関連する内容についてのみ、以下にまとめて示す。詳細は刊行後にご参照いただきたい。なお、本講演とは引用における記載方法などが異なるため、来るだけ体裁を整えたが、煩雑な部分がある点をご了承いただきたい。また、（5）・（6）はここで新たに追加した。

(1) 鈴木信氏と大坂拓氏による一連の検討

続縄文時代前半期の中葉から後葉にかけて主に道央部地域で設定されている型式として江別太式と後北式がある。近年、それらを「細分した後の型式」について、鈴木信氏（鈴木2003・2011a・2018）と大坂拓氏（大坂2007・2010・2013・2015）による検討が続いている。これらは、それぞれの論考での検討内容が入り組み、研究史的に複雑な状況となっている。私の理解では、両者には土器の型式と「細分した後の型式」の認定、それをもとにした編年において相違があると考ええる。

そのため、私の理解による「型式」と、それぞれが「細分した後の型式」を中心として鈴木編年の特性と大坂編年の特徴をまとめ、論点の整理を行い、課題を検討する。

1) 「型式」と「型式の細別」について

土器の型式については、横山浩一氏によれば「土器型式は土器を諸特徴により分類したものから、研究者が必要と認めたもののみを抽出して構成した概念。」（横山1985）である。そのため私は、「型式」は「分類を行ったもので、その分類が有効なもの。」と考える。また、その「時間的な変化」は、「層位学的方法」による「できるだけ、良好な層位関係によって時間的に選別され順序づけられた資料を用い」るため、「層位的に出土」する必要がある。また、層位的に出土するのは各遺跡からである。これらのことから、私の「型式」は「遺跡から層位的に出土した事物に対して分類を行ったもので、そ

の分類が有効なもの。」と考える。型式及び「型式」はこれらが研究者間で共有できるときに有効であり、そのため編年に位置付けることができる。

土器の「型式の細別」については、山内清男氏の「細分（型式は益々細分され）」（山内1937[1967]）があたる。そのため、型式を各研究者がそれぞれの分類により「ますます細分」したものを型式（細別型式）とすることもできる。しかし、私は、現状では各研究者が「「ますます細分」した後の型式」（「細分した後の型式」とする）の多くは、その規定にもよるが様々な追加条件の付与（型式学的な操作）を伴うため、「「ますます細分」する前の「遺跡から層位的に出土したものに対して分類を行ったもので、その分類が有効な「型式」」とは同等の分類を行うことができなくなっている場合が多いと考える。例えば土器の場合に、遺跡から出土する深鉢形土器の一個体や土器片一片は「「ますます細分」する前の「型式」」には分類できる可能性は高いが、それぞれの研究者が「細分した後の型式」に分類することは難しい場合が多いことである。このことは、「細分」において連続する変化や細かな属性を分類の対象とすることが多いのが理由であろう。

私は、このように「細分した後の型式」は型式（細別型式）とは区別し、「様々な追加条件の付与（同）により型式を段階として細分したもの」と考え、ここでは「細分型式」とする。この「細分型式」は、鈴木公雄氏による「系統型式」（鈴木公雄2008）と同義であると考えられ、「ある「型式」からたどり得る系統的な段階区分としてのとらえ方。」となり、「共時論的な「細分型式」という「単位」の再生産。」となる。私は、この「細分型式」は「「型式」における、共時性をもつ「細分型式」という系統的な段階区分としての「単位（段階）」。」と捉え、原則的には「「型式」内で有効なもの。」と考える。ただし、このことは型式（細別型式）及び「型式」における「系統」を認めないということではなく、型式（同）や「型式」における「系統」は前後する型式（同）や「型式」同士の比較からその系統性を得られるものであると考える。

2) 鈴木編年の特性

鈴木氏の編年（鈴木2003・2018など、鈴木2018は以下同）の特性は、型式の「細分」にあり、系統のなかで有効と考える属性（主に文様と文様の分割原理）をもとに、「型式の細分」と「さらなる細分」である古い様相か新しい様相かを認定する手法を用いている。そのため、属性を検討できる一個体の土器に対して、「細分した後の型式」やその「さらなる細分」の新旧を決定するためには非常に有効である。鈴木氏（鈴木2003）では具体的に型式とその「細分」を記載・記述し、編年表を提示する。それぞれの型式の「細分」は新旧として表し、様相としての古相・中相・新相または古相・新相とさらなる細分として古相1や新相1などとして示す。

一方、この特性から、同一土坑内で共伴した資料や一括資料などの層位的に出土した資料において、2個体以上の土器は「細分」の前後に分けられる場合が多い。また、そうした資料の時期（型式期・細分した後の型式期）に言及する際には、「江別太1式「古」～「中」」や型式を跨ぐ「江別太2式「新」を含む後北A式「古」」などの表記になる。このことは分析の手法によるものであり、それゆえに、この「細分」に含まれるものは、前後の型式や前後の「細分」と共存した場合にその多くを確認できる。

私の理解では、鈴木氏の編年表は、鈴木氏（2003）に部分的な改訂が加えられるが、大きな認識の変更はないと考え、最新の鈴木氏（2011b）を参照する。なお、「H37丘珠期」と「H317期」、「H37栄町期」は、分析内容は一連のものであることから、それらを鈴木氏の示した「細分した後の型式」と同等のものとして扱う。

ただし、鈴木氏（鈴木同）では後北A式と江別太1・2式の編年の位置付けがそれ以前と変わっておりそれについては鈴木氏（鈴木2011b）での位置付けを変更する。具体的には、鈴木氏（同）の図2によ

り、鈴木氏（鈴木2011b）の表1ではアヨロ2b式に対して江別太1式、アヨロ3a式に対して前後に配して江別太2式・後北A式が併行関係であったものが、アヨロ2b式に対して前後に配して江別太1式・江別太2式、アヨロ3a式と後北A式が併行関係となる。表2には「2009b改」とあるため鈴木氏（鈴木2009a）の表1を確認し、さらに鈴木氏（鈴木2003）の表12も確認したが同じ位置付けである。これは鈴木氏（鈴木同）は言明していないものの、分析の過程において、アヨロ2b式についてはa1泥炭質粘土層の形成がアヨロ2b式と江別太1式の中にあること（鈴木同：図2）、後北A式については北広里3遺跡ほかの資料における横環擬縄貼付文の検討により「口縁部が内屈しない」アヨロ3a式と後北A式の規定である「垂下擬縄+横環擬縄貼付け文」を持つ土器との併行関係を認めたこと（鈴木同：65頁、4. (2)) に起因する、「認識する土器群」と「型式の併行関係」の変更・更新と考える。

3)大坂編年の特徴

大坂氏の編年（2007・2010・2013・2015）の特徴は、大坂氏の「帯縄文系」後北式の提唱と位置付け（大坂2007）、大坂氏の後北A式が高橋正勝氏（1984・2003）の江別太式を含む（大坂2010）ことにある。

大坂氏は「帯縄文系」後北式の提唱と位置付けを行った（大坂2007）。その後、続縄文時代前半期の北海道中央部から南部にかけて分布する土器型式間の編年を整理し、本州島東北部に分布する弥生土器型式との併行関係に関する見通しを示した（大坂2010）。「北海道中央部の後北式以前の土器群」については、「K39-14a層段階」、K39-13b層段階、「江別太Ⅲ6層段階」、「江別太Ⅲ5層段階」を示し後北式については後北A式から後北C₁式を示した。その後に大坂氏は、大坂氏（大坂2010）への鈴木氏（鈴木2011a）の批判に対して後北A式と後北B式についての再度の見解を示し（大坂2013）、不支持を表明した（大坂2015）。

4)課題の検討

ここでは鈴木氏の検討（鈴木2018）に沿って、鈴木氏と大坂氏の一連の論考に対する私の理解を整理し、検討する。

鈴木氏の検討した内容は、江別太遺跡とK39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の堆積状況と、それらから出土する型式としての江別太式と後北式を「細分した後の型式」（江別太式の江別太1式・江別太2式、後北式の後北A式・後北B式）の属性（文様）と文様の系統性である（鈴木同）。私の理解では、鈴木（同）は型式である「従来の江別太式・後北式がそのまま成立しないこと」を示した点と江別太式を「細分した後の型式」である江別太1式、江別太2式を明示した点に大きな意義があると考え

A)「3.江別太遺跡の解析」について

江別太遺跡のⅢ層の堆積状況は、鈴木氏がK39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の堆積状況もふまえて詳細に検討している（鈴木同）ように、私も各文化層をそのまま編年に用いることは難しいと考える。鈴木氏と同様に江別太遺跡の堆積状況はⅢ層中に泥炭層が形成されており堆積の休止期間が想定されることと、私は通常、蛇行洲堆積物（流路堆積物-筆者註）の堆積は一樣ではないと考えるためである。当該期の「型式」と「細分した後の型式」については、今後も良好な事例により層位的に追求していく必要がある。

B)「4.江別太式の存否(1)～(5)」について

鈴木氏は「従来の江別太式・後北式がそのまま成立しない」（鈴木同：71頁）と述べることから、「江別太式」と「後北式」を型式と捉えており、ここでの型式は本稿での「型式」と同義であると考え。しかし、鈴木氏の「細分した後の型式」である細別型式とする江別太1式、江別太2式、後北A式、後北B式などが鈴木氏の属性（鈴木同）と文様の系統性の分類を通してのみ得られるとするのであれば

これらは本稿による「型式」ではなく、「細分型式」と考える。これは大坂氏が型式とする後北A式、後北B式についても同様（大坂2013）である。両者が示した分類の項目（様々な追加条件の付与（同））は多岐にわたり、連続的な変化にも及んでいるため、実際の資料に対して用いても、「遺跡から層位的に出土したものに対して分類を行ったもので、その分類が有効なもの。」という「型式」として分類することは困難であり、型式としては扱えないと考える。

そのため、ここでは本稿の「型式」と「細分型式」、前述の鈴木氏（鈴木同）の江別太式と後北式の捉え方から、江別太式と後北式を「型式」とし、江別太1式と後北A式などをそれぞれの「細分型式」と捉える。このように捉えた場合に、鈴木氏の分析（鈴木同）に同意したい。

私の理解では、鈴木氏（鈴木同）の江別太1式は江別太式の「細分型式」であり、「H37栄町期より後に出現する突起下貼付文があるもので、口頸部文様と頸部区画文がある。垂下沈線文がない古相、垂下沈線文がある新相がある。」と考える。江別太2式も同様に、「江別太1式より後に出現する垂下擬縄貼付文があるもので、口頸部文様と頸部区画文があるもの。」である。後北A式は後北式の「細分型式」であり、「江別太2式（江別太式）より後に出現する、垂下擬縄貼付文と横環擬縄貼付文があるもの。」である。こうして鈴木氏は高橋氏（鈴木同）の江別太2式を解体し、江別太3式を後北A式とし、「従来の江別太式・後北式がそのまま成立しないこと」を示した（鈴木同）と考える。こうした理解からは、鈴木氏による「従来の」ではない、型式としての「江別太式の再定義」を示す必要があると考える。江別太式の定義は、引用文献の鈴木氏（鈴木2003）にも言及はない。

江別太式の定義についての現状での私の理解は、「H37栄町期より後に出現する、突起下文様及び突起下装飾に垂下貼付文または垂下擬縄貼付文があるもので、口頸部文様と頸部区画文がある。突起下文様には垂下沈線文をもつものがある。頸部下地文は無文帯となるもの、または縄文である。縄文のものでは横走特殊縄文と横走帯縄文があり、前者は後北A式にかけて緩やかに減少し、後者は同じく徐々に増加する。文様帯は突起下のⅠ文様帯に垂下する擬縄貼付文や沈線文、刺突文列による文様をもち、Ⅱ文様帯は幅の広い文様帯で、沈線文や刺突文列により区画を行い、区画内に文様を施文する。」と考える。

佐藤（佐藤2011）による、「型式」に準ずるものとして考える「続縄文初頭の土器群」の、「3期」のN30遺跡第2号住居跡では突起下に縦に垂下する沈線文（鈴木氏（鈴木同）による突起下垂下沈線文）は1点を確認できるが、垂下貼付文と垂下擬縄貼付文はみられない。このことから「3期」は、鈴木氏（鈴木同）の江別太1式（江別太式）より古いH37栄町期に一部が相当すると考える。なお、私は「江別太式」には外来系土器として恵山式土器と宇津内式土器が伴出すると考え、分類としては「江別太式土器群」として扱う立場である。

C)「4.江別太式の存否(6)・(7)」について

私は、江別太式と後北式を考えるにあたって、大坂氏の意図する高橋氏（高橋同）の江別太式のすべてを後北式に含めること（大坂2010）には、「遺跡から出土する遺構・遺物を型式として分類する」という立場から、同意できない。高橋氏の設定の意図（1984：373頁）でもあると考えるが、現状でも「細分型式」である後北A式が遺跡から出土する場合は後北B式と混在して出土するケースが多く、それに対して、「型式」である江別太式は後北式とは混在せずに単独で出土するケースが多いためである。このことは、後北式と江別太式は遺跡単位でみた場合でも、それぞれ土器の型式としてのまとまりは独立性が高いことを示すと考える。

後北A式と後北B式を検討するにあたっては、鈴木氏（鈴木同）の註12・13を理解する必要があるため、引用する。註12は「「常態であるほど例数が少ない」とは例数＝量の指摘である。前後型式の共存

は例外（＝非原則例）ではなく「埋納時の共時性」のひとつで、それを例外と考えたのは私ではなく大坂である。」、註13は「「埋納時の共時性」には、前型式の使用期間における終末状態と後型式の共存同型式や併行型式の共存がある。大坂氏は埋納時の共時性＝型式と考えるが後者は前者に包含される。」である。

鈴木氏は「「単帯型」{の}後北B{式}は「多帯型」{の}後北B{式}との共存にある場合に存在が確認できる。」（鈴木同：71頁）（{内は筆者による、以下同）と述べており、これは註12・13による「前後型式{または「細分型式」}の共存は例外（＝非原則例）ではなく「埋納時の共時性」のひとつ」と考える。私の理解では、鈴木氏の指摘は型式（細別型式）としてのまとまりと、「時期」としてのまとまりを区別する必要があると捉える。そのため、大坂氏が型式とする後北B式の事例（大坂2013）として示した「萩ヶ岡遺跡墓112」出土土器は、鈴木氏（鈴木同）の規定によれば後北B式と後北A式が共存しており、「細分型式」の時期区分は始まりをもって行うことが通常であることから、時期としては「後北B式期」と述べることができる。このことから、鈴木氏（鈴木同）が「後北A式古 {相} 」とするような「江別太式」の文様を持つものが「後北A式」の古い時期に共存することも認め、「後北A式古相期」となる。また、鈴木（鈴木同）の「後北A式古 {相} 」と「江別太2式新 {相} 」は、それぞれとが共存した場合にのみ確認できるという理解である。

「鷺ノ木遺跡8号土坑」出土土器群については、「覆土の上部から下部が堆積するまでの時間幅」があり、「墓112と千歳市オサツ2遺跡GP2は埋納 {遺物} の共時性がある」については鈴木氏（鈴木同：70頁）が想定するように両者が合葬墓であった場合に「合葬墓に副葬される遺物同士における時間幅」を想定する。しかし、ここで示された「時間幅」は「細分型式」の「時間幅」と「共時性」を判断するため論拠としては、鈴木氏の指摘する「前後型式{または「細分型式」}の共納を否定する根拠ではないものの、註12・13で示された理由と同様により「前後型式{同}の共納」のみを肯定する根拠としても十分ではないと考える。

大坂氏の「単帯型」（大坂2010・2013）は、確かに鈴木氏の指摘する認定の問題（鈴木同）があるしかし、鈴木氏の「「単帯型」はその時々の「多帯型」から他律的・断続的に派生した個別であり系統はなく「多帯型」の変異」」とする見解（鈴木同：71頁）は、「細別型式」の検討では「他律的・断続的」とまでは言い切れないと考える。私は、「単帯型」は「I文様帯にのみ擬縄貼付文をもつ類型」と考えられる可能性も残ることから、鈴木氏（鈴木同）の指摘する認定の問題とそれに関連する一部の資料を除けば、大坂氏（大坂2013）の示した、文様の型式を越えた「江別太式から後北C₁式にみられる系統」とする「文様の系統性」の分析の意図に同意する。

これらのことは、現状においても後北A式、後北B式の調査例は決して豊富なわけではなく、類例が少ないことにも起因している。そのため、註13における「前{の細分}型式の使用期間における終末状態と後{の細分}型式の共存」とするののか、「同{じ細分}型式」とするののかは、後北A式と後北B式という「細分型式」の認識の違いに留めておき、「出土事例の蓄積」を含めて、今後も引き続き検討していきたい。

5) 小結

私の理解では、大坂氏は後北A式について「「後北A式」として再定義するのも一つの方法だと考える。」（大坂2013：58頁）や「用いる型式名および型式名称が指し示す範囲について、大沼らによる指摘を追認する立場をとったのである。」（同）などの記述と用いている分析から、「後北A式」を先述のような分類が可能な型式（細別型式）と捉えているのか、段階としての「細分型式」として捉えているのかが不明瞭ではないかと考える。大沼氏は「後北式の4型式細分」（大沼1982b：77頁）と述べて

おり、それ以降も基本的にその理解は踏襲されていると捉える。大沼氏の後北A式、後北B式、後北C₁式、後北C₂・D式については示された属性が特徴的であるため、それらをもってそれぞれを型式（細別型式）と捉えることは可能であり、それを用いた分類や編年表での有用性・有効性は高いと考える。しかし、鈴木氏（鈴木同）の示した後北A式と後北B式の属性と文様の系統性、江別太式の分析からは、後北A式と後北B式は後北式の「細分型式」と考えられる。そのため、型式（細別型式）は「後北A・B式」とし、「細分型式」を鈴木（同）による「後北A式」、「後北B式」とすることも一案としてあるただし、このように捉えても鈴木（鈴木同）と今回の指摘以外は、大沼氏の型式（細別型式）の主要な部分や細分が進む広域編年での位置付けは大きくは変わらないと考える。

鈴木氏（鈴木同）については、大坂氏（大坂2013）が不適切な引用や省略、曲解があることを指摘し私も前述したように一部で婉曲的な表現が多く、説明が少ないため述べる意図が解り辛いところがあると考え。しかし、型式は言明していないため全体の記述に不明瞭なところはあるが、細別型式を「細分型式」として捉えた場合の江別太1式、江別太2式、後北A式、後北B式の認識は一貫していると考え。そして、鈴木氏が用いている分析（鈴木2011a・同）は、それを証明するために行われていると言える。

鈴木氏と大坂氏の間で取り交わされた一連の論考についての私の理解は、型式とそれを「細分した後
の型式」について、型式学的にどのように捉え、扱うのかという点に違いがあり、前述のように私は
「型式」と「細分型式」と考え、その場合に鈴木氏の捉え方（同）に同意する。しかし、私はこれまでの検討を踏まえ、「細分型式」が前後「型式」と共存したり、「細分型式」にみられる様相と異なる分析があるからといって、自らのそれをもって他の研究者の型式や細別型式の多くを否定する根拠のすべてにはならないと考える。ここでの「細分型式」は、原則的に「型式」の細分」と考えるためであるまた、論考においては、批判や同意する内容、訂正、変更、更新などについて、今後も丁寧に説明し、明示する必要がある。

(2)当該期におけるヤウンモシリ島と本州島東北地域の土器型式との併行関係について（図1～7）

当該期における北海道島と本州島東北地域の土器型式との併行関係については、対象を広く扱ったものに斎野裕彦氏（斎野2011）と藤沢敦氏（藤沢2018）の編年がある。両者はともに本州島東北部地域における各地域での詳細な検討をもとに、広域編年を構築しているのが特徴である。しかし、斎野氏（斎野同）は弥生土器の全般について、藤沢氏（藤沢同）は弥生時代後期から飛鳥時代までの土器を扱っていることから、型式（細別型式）と細分（「細分型式」や土器群などによる時期区分（段階））それをもとにした編年において細部では違いがみられる。

そのため、前項と同様に、私の理解による「型式」と「細分型式」を中心としてそれぞれの編年の特性をまとめ、佐藤（佐藤1998・2000・2004）と鈴木氏（鈴木同）、大坂氏（大坂2010）の道内の編年の整理を行い、対比する。

1)斎野編年の特性

斎野氏の編年（斎野同）の特性は、東北の弥生土器について、弥生時代を通して全域の器種・器形の検討を行い、縄文晩期から存続するA類、遠賀川系土器のB類、弥生時代に出現するC類に分類し、それらを各型式に対応させながら器種・器形と文様により「型式」の変遷を説明し、広域編年に位置付けたことにある。

広域編年の対比では、広義の天王山式は後期に位置付けて細分を行い、佐藤信行氏（佐藤信行1990）が提唱した兔Ⅱ遺跡出土土器を古段階、狭義の天王山式を中段階、それに後続する踏瀬大山式を新段階とする三期の時期区分に対応するVa期・Vb期・Vc期に分けた。それに後続する赤穴式につい

ては、古段階と新段階に対応するVd期・Ve期に分け、後期を初頭（Va期）・前葉（Vb期）・中葉（Vc期）・後葉（Vd期）・末葉（Ve期）の5期とした。また、広義の天王山式については、「受口状の複合口縁を特徴とする」とした。

また、弥生時代後期後葉（Ve期）は辻氏（1995）の土師器編年Ⅰ期に相当するとし、Vd期・Ve期については庄内式の前半・後半におおよそ併行するとした。北方との対比では、大沼忠春氏（大沼1982a）による後北C₂・D式の「（初期）の段階」をVd期前半（後葉前半）、次の「（一般的な）段階」をVd期後半（後葉後半）からVe期（末葉）に併行するとした。

2) 藤沢編年の特性

藤沢氏の編年（藤沢同）の特性は、分析対象として、各時代や地域、分野で専門とする研究者が異なることが多く、それぞれに独自の研究方法がある、東北と北海道から出土する弥生時代後期から飛鳥時代までのすべての土器（弥生土器、土師器、須恵器、続縄文土器、オホーツク土器）を対象としていることにある。それらについて、主に出土状況から相互の土器編年の対比を行い、併行関係と実年代対比を行っている。

広域編年の対比では、弥生時代後期の時期区分は狭義の天王山式の段階を後期古段階、狭義の天王山式に後続する段階を後期中段階、最後の燃糸文系土器の段階を後期新段階とし、斎野氏（斎野同）のVa・Vb期が古段階、Vc期が中段階、Vd・Ve期が新段階に対応するとした。V様式と庄内式の区分についてはそれぞれを後期中段階と新段階に対応させた。北方との対比では、後北C₁式は課題であり、不確実な点が多いとしながらも、後北C₁式の末を法仏式期と考え、第V様式中葉から後葉となるとし、後期中段階ころを想定した。後北C₂・D式は、その古段階から中段階にかけてのものが後期新段階の土器から塩釜式初頭ごろに併行するとし、おおむね庄内式期から布留0式に一部かかる時期と考えた。

また、前半期の続縄文土器については東北と新潟県での共伴事例などから検討し、後半期は榊田朋広氏（榊田2009）の北大式の「細分型式」である北大Ⅰ式については引田式との共伴が安定しているとした。

3) 課題の検討

A) 続縄文時代中期から後期併行期の編年について

ここでは、斎野氏（斎野同）と藤沢氏（藤沢同）で扱いの異なる、東北部地域の弥生時代後期の土器群について「広義の天王山式」を斎野（斎野同）の指摘する「受口状の複合口縁を特徴とする」土器群として、先述（3.（3）3）のように「型式」に準ずるものとし、免Ⅱ遺跡出土土器や狭義の天王山式湯船沢式、赤穴式などはその「細分型式」と扱う。これは、当該期で設定される型式が充実する中部東半域においても、常盤式と湯船沢式、上野原A遺跡出土土器群、赤穴式はその文様や器種、器形（佐藤（2004）などの「細別器種」に準ずるものとする）の系統性からは、前述の「型式」とするよりも「広義の天王山式」の「細分型式」と捉えたほうが、各型式や土器群において分類などの扱いが異なる燃糸文を施文する土器などに誤解が少なく、編年対比では理解しやすいと考えたためである。当該期の主要な文様（交互刺突文・退化交互刺突文、沈線文、燃糸文）をもつ土器群の変遷は、大枠では研究者間でほぼ共通理解があると考え、このような方法を用いた。

a) 恵山式と天王山式の細分における並行関係について

佐藤（佐藤2000）は「本州域における弥生時代後期の土器が、複合口縁を持つ土器群の成立に画期が求められるならば、」とした上で、「北海道島における弥生時代後期併行の土器は、道南部では、恵山式土器系のアヨロ3a類土器群、南川IV群土器の成立（恵山式土器第Ⅳ期）、道央部では後北A式土器群の成立（中期までさかのぼる可能性もある）、道東北部での宇津内ⅡaⅡ式土器群、主に道東部での下

田ノ沢Ⅱ式土器群の成立が画期と考えている。」とした。また、編年表においては道央部での後期の開始をⅠ期：後北A式として示した。なお、当時に示したⅠ期--a段階は鈴木信氏（鈴木1998）の後北A式のa段階との対比を目指したものであり、現在の理解によればⅠ期--a段階で提示した資料は、「型式」としては江別太式と「細分型式」の後北A式（鈴木氏（鈴木同）によれば、江別太2式の新相または後北A式の古相）を含んでおり、「後北A式期」である。

斎野氏（斎野同）についての私の理解では、中期中葉（Ⅲa期）の南部（仙台平野以南）で受口状口縁の細頸壺があらわれ、中期後葉（Ⅳ期）の「北部南東域～中部南東域（北上川中流域）」では上野遺跡で受口状口縁の甕と鉢がみられる。後期（Va期からVe期）のうち初頭（Va期）から中葉（Vc期）に位置付けた広義の天王山式期については、「受口状の複合口縁を特徴とする」とする。

江別太式と後北式の口縁部の特徴は、江別太式には口縁が肥厚するものがあり、後北式では後北A式と後北B式で口縁が肥厚するものが多く、一部で後北C₁式にもみられるが、複合口縁はみられない。受け口状の口縁は恵山Ⅱ式（南川Ⅳ群土器、アヨロ3a類土器群）と後北B式にあるが、複合口縁はみられない。大坂氏の「内湾口縁」（大坂同）（単純口縁の受口状口縁-筆者註）は斎野氏（斎野同）による主に中期後葉（Ⅳ期）の特徴である。また、恵山Ⅱc式に存在する「器形」として示す寸胴な器形の鉢（大坂同：第5図31・32）は小型の鉢（粗製）である。私の細別器種の一連の分析や他の弥生土器などの多くの分析によっても、細別器種（≡大坂の「器形」）の存続は「細分型式」（場合によって型式や細別型式も）を越えて変遷し、それは精製品でも変わりはなく、小型の粗製土器のみでは「細分型式」における帰属時期の判断はさらに難しいと考える。

以上より、恵山Ⅱ式と後北B式には受口状の口縁部はみられるものの複合口縁と交互刺突文はみられないこと、「単純口縁の受口状口縁」は甕と鉢では斎野氏（斎野同）の中期後葉（Ⅳ期）の主な特徴であること、「特徴的な器形」の寸胴な小型の鉢（粗製）はそれのみで時期を確定できる器形（「細別器種」）とは捉えきれないと考えることから、現状では恵山Ⅱ式（南川Ⅳ群土器、アヨロ3a類土器群）は斎野（斎野同）の中期後葉（Ⅳ期）に併行すると考える。また、先述（3.(1)）の鈴木氏（鈴木同）により後北A式とアヨロ3a式が併行することから、後北A式も中期後葉（Ⅳ期）に併行すると考える。現状では後続する後北B式を後期初頭（Va期）に位置付け、免Ⅱ遺跡出土土器や狭義の天王山式との併行関係を想定するが、後北B式にも複合口縁と交互刺突文はみられないことから、中期後葉（Ⅳ期）に一部が併行する可能性もあるため良好な出土例を待ちたい。これらの見解は佐藤（2000）からの変更点を含めた現状での理解である。

b)後北C₂・D式と赤穴式の細分における並行関係について

近年、岩手県長興寺Ⅰ遺跡68号土坑（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002）において、後北C₂・D式と赤穴式の特殊撚糸文段階（斎藤1986）が共伴した。同資料について、斎野氏（斎野同）は後期後葉（Vd期）とし、藤沢氏（藤沢同）は弥生時代後期新段階（斎野氏（斎野同）のVd・Ve期）に位置付けた。

私は同資料の後北C₂・D式の個体は、底部が上げ底ではないことから、大沼忠春氏（大沼1982a）の「（一般的な）段階」以降の時期と考える。また、斎野氏（斎野同）が後期中葉（Vc期）とする撚糸文を施文する湯船沢式と千歳（13）遺跡には、佐藤（2004）によればⅢ期土器群の1期（「（一般的な）段階」から始まる）に、赤穴式相当段階の特殊撚糸文段階の同じ細別器種と考える、深鉢M（口縁部がやや肥厚し内湾するバケツ形）（湯船沢式：斎野同454頁305、千歳（13）遺跡：同310）がある。前段階である湯船沢式や千歳（13）遺跡の中に同じ細別器種があるならば、その系統性からⅢ期土器群の1期と「（一般的な）段階」の一部は後期中葉（Vc期、後期中段階）に遡る可能性もある。

これらのことから、私のⅢ期土器群の1期は少なくとも後期後葉（V d期、後期新段階）に位置付けられ、後期中葉（V c期、後期中段階）まで遡る可能性もある。その場合には、Ⅱ期土器群（大沼氏（大沼1982a）の後北C₂・D式の「（初期の）段階」を含む）は後期中葉（同）に位置付けられる。赤穴式相当段階の特殊撚糸文段階はⅢ期土器群の1期と併行することから、後期後葉（同）に位置付けられ、それとの併行関係から十王台2a・2b式についても同様である。また、斎野氏（斎野同）と藤沢氏（藤沢同）の長興寺Ⅰ遺跡出土土器の位置付けによれば、Ⅲ期土器群の1期（佐藤（佐藤1998）では庄内式の後半段階に位置付けた後北C₂・D式の「（一般的な）段階」の始まり）は庄内式の始まり（後期後葉）と併行する可能性が高いと考える。これらの見解は佐藤（佐藤1998・2000・2004）からの変更点を含めた現状での理解である。

(3)小結

以上より、東北の弥生土器との広域編年では、中期後葉（Ⅳ期）の単純口縁の受口状口縁の甕と鉢がみられる時期に恵山Ⅱ式（南川Ⅳ群土器、アヨロ3a類土器群）と後北A式が併行し、後期初頭（V a期）から後期中葉（同）に後北B式から後北C₁式が併行し、後期中葉（同）の一部にⅡ期土器群（後北C₂・D式の「（初期の）段階」を含む）、後期後葉（同）にⅢ期土器群の1期（同「（一般的な）段階」の始まり）が併行する可能性がある。また、Ⅲ期土器群の1期は庄内式の始まりと併行する可能性が高い。

この編年観をもとにすると、本州島の東北地域北部では、後期中葉に後北C₁式（聖山KⅡ群後北C₁式併行）が一部で点的に分布し始め、後期後葉から古墳時代前期には後北C₂・D式の「（一般的な）段階」が少数ではあるが、広く点的に確認される。このことから、後期中葉以降に両者の影響関係が深まり、後期後葉から古墳時代前期にかけて、その交流は少数ではあるが、広域的に広まることを想定することができる。

なお、編年表での実年代は藤沢（藤沢同）により作成し、今後の「型式の細分」の参考として、各地域での型式（細別型式）や「型式」、「細分型式」、時期、段階などがどのような時間幅をもつか（それぞれがどのような時間幅を区分しているのか）についての私の想定を示した。

(4)まとめ

ここでは、私の理解による「型式」と「細分型式」をもとに、続縄文時代前半期の土器研究についての道内と道外の2つの課題を検討した。ここでは課題に対して、「型式」と「細分型式」、「編年の特性」を理解することで、それらを踏まえて整理した。このような方法を用いたのは、型式と「細分した後の型式」はそれぞれの地域で研究史があり、研究状況なども異なることから、可能な限りそれらを尊重しつつ、広域編年において各地域との共通理解を得ることを目的としたためである。このような検討では個別の細論とともに、研究者間で共有できる大枠の議論も欠かせないと考えたことによるが、各位のご指摘を賜りたい。

(5)今後の課題

(1) から (4) を踏まえ、恵山式を「弥生式」の弥生土器として弥生文化のものとして捉えるのか、「続縄文式」の続縄文土器として続縄文文化のものとして続縄文文化のものとして捉えるのかは議論が多い。

大坂拓氏は「「田舎館式」の中で恵山式との類似性が指摘されてきた資料は、周辺地域から農耕社会に合流した、恵山式土器製作者を含む集団が製作したもの-いわば「恵山式」そのもの-だったことが明らかになってきた。」（大坂2015：464頁）とする。また、農耕社会の土器として、「大洞系と類遠賀川系が作り分けられ、それぞれが型式変化を遂げる津軽平野の垂柳式土器など」の特徴をあげ、「恵山

式土器は農耕社会の特徴が稀薄であり、大洞式土器の特徴を色濃く残すものとして解釈することが妥当」とする。

私は、現状では大坂氏も「道央部と共通性の高い」とする「尾白内Ⅱ群」（千代・石本1981）が島南西部地域での「続縄文式」の初頭の土器群と捉えており、それらは後述する「続縄文初頭土器群様式」と考える。そして、その後に二枚橋式に併行する「弥生式」の下添山式と後続する恵山式が島南西部地域にひろがると考える。このことは、島南西部地域の土器群の変化が、それまで用いていた島南西部の晩期の土器群の構成（それまでに細別器種の構成を増やし続けてきた）から、続縄文初頭にいったんは島中部との共通性が高い土器群の構成（細別器種の構成が少ない）へと変化することである。このことは、津軽・下北半島では確認できない。その後に細別器種の構成が「弥生式」と共通性の高い土器群の構成（細別器種の構成が明らかに多い）をもつ、「弥生式」の下添山式と後続する恵山式に変化すると考える。私は、現状では大坂氏の述べる類遠賀川系とする外来系土器（異系統土器）の津軽・下北半島と島南西部地域でのあり方は、斎野裕彦氏が示したもの（斎野2011）によっても、本州島東北地域の弥生文化の他の遺跡間で普遍的にみられる濃淡と考えられるあり方と考える。恵山式と田舎館式にみられる類似性について「恵山式土器製作者を含む集団が製作したもの」と考えるのであれば、むしろその類似性は土器群としての共通性が高いことを示していると考えられる。また、土器群において、一部で別の文様構成をもつ同じ細別器種を同様に用いて、それらの細別器種の構成が類似するのであれば、同じ道具類を同じように用いる、同様の社会を背景にした人々と考える。

これらのことから、土器群のあり方からは、島南西部地域は晩期からいったんは「続縄文初頭土器群様式」に変化し、その後に「下添山式と恵山式の土器様式」に変化すると考えることができる。そのため、島南西部地域は、続縄文文化の初頭において、いったんは縄文文化から続縄文文化となり、その後には弥生文化となり、「後北B式から後C1式」または「後北B式から後北C₁式の土器様式」の広がりにより、ふたたび続縄文文化になると考える。そして、その後には擦文文化になると考える。

また、島南西部地域での下添山式期と後続する恵山式期の遺跡のあり方は、北斗市茂別遺跡（（公財）北海道埋蔵文化財センター1998）では海岸段丘上にしっかりとした掘り込みのある方形の竪穴住居を用いて居住域を構成し、その周辺に土坑墓群による墓域を形成する集落構造をもっている。函館市恵山貝塚（北海道立埋蔵文化財センター2005）では海岸段丘上にしっかりとした掘り込みのある竪穴住居とともに、貝塚と盛土遺構、土坑墓を形成する集落構造である。北斗市下添山遺跡（吉崎1982）では、詳細は不明ながらも、海岸線からほど近い沖積低地に立地しており、海岸砂丘列の後背湿地や低地の利用とそこでの活動が想定できる。これらからは島南西部地域の当該期では定住的な社会を想定できることから、遊動的な社会を想定する続縄文文化と考えるよりは、須藤隆氏（須藤2000）などにより示される、定住的な社会である弥生文化で想定される社会構造と考え、弥生文化として位置づけたい。また、この地域社会での主な生業は海獣類や大型魚類などの漁労と貝類の採集で、それらを支える陸獣類の狩猟、植物採集と一部の農耕によっている可能性が高いため、西川修一氏（西川2018）による弥生社会の列島各地でみられる「海洋民」の人々の文化・社会（弥生文化のなかでの本州列島における地域的な文化・社会-筆者）が展開していたと考えたい。

一方、これらの島南西部地域を中心とする遺跡を除く、ヤウンモシリ島での続縄文文化の時期（続縄文時代）の遺跡のあり方は、一般的に、掘り込みの浅い竪穴住居や焼土群と遺物集中域、柱穴群の組み合わせにみられるテント（高瀬2014：27頁）などの移動性に適した簡易的な建物がみられる集落（札幌市H37遺跡丘珠空港内（札幌市教育委員会1996）やK135遺跡（札幌市教育委員会1987）、安平町（旧早来町）大町2遺跡（（公財）北海道埋蔵文化財センター2006）など）と、その集落に接して確認でき

ることのほばない、同時期の集落から独立した土坑墓群による墓域（浦幌町十勝太若月遺跡（浦幌町教育委員会1974・1975）や石狩市八幡町遺跡ワッカオイ地点D地区（石狩市教育委員会1977）、苫小牧市タプコブ遺跡（苫小牧市教育委員会1984）、恵庭市西島松5遺跡（（公財）北海道埋蔵文化財センター2002）など）で構成される。これらからは遊動的（石井淳1997）な集落社会を想定できる。

このように、当該期でのヤウンモシリ島の南西部地域とそれ以外の地域での遺跡のあり方からは、想定できる集落社会の構造が異なる。そのため、定住的な集落社会である弥生文化と捉えることができる島南西部地域の定住的な社会構造と、遊動的な集落社会である続縄文文化と捉えることができるそれ以外の地域の遊動的な社会構造という違いは当該期では明らかであり、それぞれは異なる文化・社会であったと考える。

ただし、これらのことは、島南西部に本州島東北部地域や、津軽・下北半島などからの、大量の集団移動や集団移住を想定していることではなく、島南西部地域の縄文時代晩期の人々が、続縄文時代初頭にいったんは続縄文文化・社会の生活の仕方（遊動的な社会・文化）を主体的に導入し、その後の下添山式期以降に今度は弥生文化・社会の生活の仕方（定住的な社会・文化）を主体的に導入した結果であると考えられる。ふたたび続縄文文化・社会の生活の仕方（遊動的な社会・文化）を主体的に導入するのは、聖山K群のあり方からは、「後北B式～後北C1式併行期」と考える。

私は、このような通時的で広範な遺跡のあり方の違いから導くことのできる続縄文文化と弥生文化（ここでは詳述しないが、また古墳文化）の社会構造の違いは、遺跡の紹介や報告、論考、概説などでこれまでに数多く示されてきており、広く共通理解があるものとして、重ねて述べるべきものではないと考えてきた。しかし、大坂氏のようなとらえ方もあることを知り、確かにこれまでは明確に対比するような形では特段には強調されてこなかったと考えることもできるため、ここで私の理解により、考古学的に考える文化の違いについて整理し、示した。なお、当然であるが、このことは考古資料を用いて細かな特定の時期や狭い地域を検討する必要があることを述べているのではなく、これらによってえられる細やかな個別の事象による解釈と結論は、このような大枠として規定する文化や時代とは別に検討していく必要があることは言うまでもない。

現状では南西部地域の縄文時代晩期後葉と続縄文時代初頭期の資料は多いとはいえないため、具体的な資料にもとづく検討は今後の課題であるものが多い。今後とも検討していきたい。

(6) 帯縄文について

(1) から (4) とした前稿では受理前の2018年までの論考を対象としたため、2019年の鈴木信氏による帯縄文の発生と拡散についての検討（鈴木2019）を追記する。

2019年には、鈴木信氏は帯縄文について、今日的課題として、①なぜRLが用いられるのか未解明である、②特殊縄文から帯縄文が発生した原因について未解明であるから、その発生地の特定制も含めて明らかにする、③拡散の過程を通じて帯縄文の汎用性を検討する必要がある、の3点を挙げ、帯縄文の発生と拡散を検討した（鈴木2019）。考察の到達点のみを示すと、①については、「長条が用いられたのは、押捺点を移動する方法によって長狭の施文単位が実現可能となり、そのために必要となるためである」とした。RLが用いられたのは、「右手を使う場合、縦・横方向に長条で带状の施文単位を転写するには適していたからである」とした。②については、特殊縄文から帯縄文が発生したのは恵山式との接触によるが、恵山式通有の技法から逸脱した結果でもあるとした。また、道央での施文状況から、「中間の段階において、原体のつくり（撚り）はそのまま新たに押圧方法を取り入れたことによる」ことを示した。このことから「道央・堀株神社遺跡・青苗B遺跡などでは恵山式との接触が弱く、その影響を段々と受け入れた」と考えた。③については、帯縄文の拡散の過程は、「その始発は「波及地」

東縁や周辺部あるいは道央においてみられ、（それら地域では-筆者注）帯縄文と特殊縄文・帯縄文と普通縄文などや土器製作技法の混在がある。この状況はその場で帯縄文への交替が起こりつつあったことを示す。」とした。そして、帯縄文は道東に及びさらに道南部へ広まったとした。くわえて、「沈線区画の帯縄文は江別太1式や南川IV・アヨロ3に多用され、刺突区画の帯縄文は江別太1式以降にも多用され後北式以後にも継承される。」とした。おわりにでは、装飾的RL④を多用する南川IV群は、道央の影響によって変質した恵山式といってよいとした。江別太1式以降に帯縄文が道南へ展開することは単なる土器の変化に留まらず、竪穴住居舌状張り出し・黒曜石製凹基石鏃の出現とも同期することから続縄文中葉後半における恵山文化の変質は、道東起源の要素が道央を通じてもたらされた結果と考えられるとした（16頁）。

押圧方法の分析については実際の資料に基づいて身体動作を含めて再現を行っており、今後も参考とすることができる重要な検討であると考える。論考での検討は多岐にわたっており、今後も検討していきたい。

2. 石器

高倉純氏は、当該地域の縄文時代晩期から続縄文時代前半期にかけての石器群の変遷を検討した（高倉2010）。そこでは、島内に石狩低地帯と渡島半島、釧路・網走地域の三地域を設定し、石器群の地域的なあり方を、石器群と器種構成、石器石材利用、系列構成（高倉2005）から示した。また、両面調整石器の製作工程の検討を中心として、縄文から続縄文時代への変容を検討した（高倉2011）。そこでは縄文時代早期から続縄文時代前半期にかけて、同じような石器製作工程が繰り返し、相互には直接的な系統関係がなくとも発現しうると考え、こうした類似した現象が時間的な間隔をおいて繰り返し現れ、盛行することを「反復性」と呼んで問題化した。それについては、「少なくとも、当該地域の縄文時代前期から続縄文時代前半期にかけては、同じような生業形態にウェットがおかれることによって、夫形の刺突具や切削具を作出する両面調整石器製作工程の必要性が高まったのだ、と考えてみたい。」

（27・28頁）とした。今後の課題としては、「指標的な石器の有無に議論の焦点をあわせるのではなく製作や仕様の集約性、継続性といった定量的な側面の評価が必要」であり、「組織論的な観点からそれらがどのように運用されているのかを問わねばならない」（29頁）とした。

佐藤由紀夫氏は、当該期の非破壊による石器の石材を推定するため、肉眼観察に加え、比重による検討を行い、磨製石斧の流通から紀元前一千年紀のヤウンモシリ島と東北北部を検討した（佐藤由紀夫2016）。北海道の磨製石斧には①擦切技法で製作される（高瀬2002）。②一側面が平坦な三面石斧の形状を呈す（斎野1995）。③平面形が左右不均等であったり、側面形（縦位断面）の主面同士が不均等であったりする。そのため、これらの特徴が認められる磨製石斧を仮称北海道系と称して、分析を行った。その結果、弥生Ⅱ・Ⅲ期の津軽平野と秋田平野の緑色片岩製磨製石斧は、大洞C2式期～弥生Ⅰ期では津軽半島～津軽平野～秋田平野と順に石材の比率が下がるのに対し、弥生Ⅱ・Ⅲ期では津軽平野の緑色片岩製磨製石斧の比率は製作地のヤウンモシリ島・太平洋側よりも高く、秋田平野も津軽半島と大差ない比率であった。このことから、「津軽平野の人たちは、大洞C2式期～弥生Ⅰ期とは異なる緑色片岩製磨製石斧の流通関係を構築していた蓋然性が高く、「製作地である北海道・太平洋側の人たちなどと直接交渉・入手していた可能性がある。」（13頁）とした。また、「たとえ北海道・津軽海峡沿いや津軽半島の人たちを経由して入手していたとしても、それらの地域は単なる経由地であり、当初から流通・交換の目的地は津軽平野であった」（13頁）と考えた。秋田平野の場合には資料的な制約から不確実な部分があるものの、津軽平野に連動した様相と理解することから、「津軽平野の人たちから再配分されていたのであろう。」（13頁）とした。一方、同じ東北北部でも、馬淵川・新井田川流域は、弥

生Ⅱ～Ⅳ期の様相もそれ以前とは変わらないことから、「津軽平野からの再配分ではなく、前代と同じく、下北半島経由で緑色片岩製磨製石斧を入手していた」（13頁）と考えた。津軽平野側からのヤウンモシリ島・太平洋側への対価としては、鉄についての慎重な姿勢を示すものの、「鉄製品の可能性は排除しないで検討していきたい」（13頁）とした。このことについては別稿での検討がある（佐藤由紀夫2018：6.交流と交易で後述）。

高瀬克範氏は、当該地域の縄文文化と続縄文文化の関係に関する理解にはまだ定説がないとして、見解を整理して、「続縄文文化以降に発達するサケ科魚類に大きく依存した経済」が「縄文文化にまで遡るのか否か」が重要な論点だとした（高瀬2017：111頁）。このことから、縄文～続縄文文化前半期の主要な利器である石器の利用方法が判明していなければならないため、サケ科魚類の利用が想定される縄文遺跡から出土した石器の使用痕分析を急務の課題として挙げ、石狩市紅葉山49号遺跡出土の剥片石器の分析を行った。結論では、「1）尖頭器は多くが槍・鉞の穂先であるが、一部に木材と皮の切断具が含まれている。2）ナイフは植物加工用の一群と、皮革加工の一群が存在しており、長さ10cmをこえる大型の個体は皮革加工用である。加工対象となった植物には木材だけでなく、草本類も含まれる。3）スクレイパーには使い込まれている資料が多く、「エンド」と「ラウンド」は皮のなめし作業との相関性が高い。「サイド」には川の切断具が多いが、木材の切断具も含まれる。4）石錐は使い込まれているものも多く、操作方法は刺突ではなく回転穿孔である。なかでも、皮革の穿孔に用いられたものが圧倒的に多く、角・骨、貝の穿孔に用いられたと推定される資料も少数ながら認められた。また、黒曜石製の資料は、粘土鋳物の穿孔に用いられたと推定され、おそらく土器補修や石製品製作の用途に利用されたものと考えられる。5）木製容器製作の仕上げ工程で、剥片石器が積極的に利用されたことを示す証拠はない。6）魚類をふくむ動物が、大量かつ集中的に解体処理されたことをしめす証拠はない。」（118・119頁）の6点を示した。今後の課題としては、「縄文文化期にサケ科が積極的に利用されていた可能性のある千歳市・標津町内における同様の分析や、続縄文文化における剥片石器類の利用方法の解明」（119頁）をあげた。

3.骨角器

福井淳一氏は継続的に骨角器を検討している。北日本弥生文化・続縄文文化前半の骨角器についてはこれまでの成果を俯瞰した（福井2018）。今後の課題として、北海道での鉄器の普及と関連して、骨角器の加工痕の詳細な検討をあげた。また、東北地方弥生文化との関連では、縄文文化晩期後葉以降の骨角器激減現象などの要因を明らかにしていく必要があるとした（10頁）。

北海道出土の骨角製針については、全道の旧石器文化から考古学的なアイヌ文化までの集成を行い、検討した（福井2019b）。分類については幅・厚さによる太さを第一基準で大別し、目処・長さ・断面・素材の属性分類基準をもとに細別した（55・56頁）。その結果、「北海道は日本列島の他地域と比べ、その利用は長く、近代にまで及ぶ。また、細型針が多く、極細針や長太針が一定程度存在する点が特徴」であるとした。そして「このような特徴や変遷は、北海道での衣服や皮革製品、編組製品、布製品、交易関係などの特徴や変遷を反映したもの」と考えた。今後の課題としては、「北海道以外の骨角製針及び北海道も含む金属製針の出土例の集成、民族例の集成など」をあげた（69頁）。

小林康氏は、礼文華遺跡から出土した新例の鉞頭を紹介し、続縄文期前半における噴火湾岸域について考察した（小杉2016）。その中ではモリ・ヤスの用語を整理し（3頁：表1）、続縄文期の鉞頭を総体的に取り扱った高橋健氏による分類（高橋2008）を主に検討しながら、「貫入/非貫入（突き立て）」を基準とする刺突深度と着柄方法による新たな分類案を示した。分類案は時期的な位置づけを含めて、今後も検討していく必要がある。

3.鉄と鉄器

笹田朋孝氏は、北海道の鉄と鉄器について、鉄器生産と個別器種の検討、鉄器の普及などの成果をもとに鉄の様相の変遷を通史的にまとめた（笹田2013）。続縄文の鉄器については、主に続縄文後半期の個別器種について検討した。

4.集落

松田宏介氏は集落遺跡の「消滅」というテーマを起点として、研究史をたどり、石狩低地帯北部の野幌丘陵付近の竪穴住居址と土坑墓について、江別太1期から円形・刺突文土器群期までを検討した（松田2010）。竪穴住居の盛衰については、「地域ごとの「消滅」過程には時間的にも傾向においても差異があること」（78頁）をデータから示した。土坑墓数については、「大きな変化はない」とし、「土器型式件の変化による前半期/後半期という区分とも、竪穴住居址の盛衰とも一致しておらず、必ずしも一連の動向とは読み取れない」（79頁）ことを示した。北海道での続縄文研究については、河野広道氏らの研究の方向性と起因する問題について議論を提起し、今日的な課題として、資料に基づく社会組織や集団の分析の必要性を述べ、「従来の研究の枠組みを自覚的に見直し、資料を再検証する試みが急務」であることを指摘した。

5.生業

鈴木信氏は生業により弥生文化と続縄文文化を分類し、「生業分化しなかった文化（ただし、後述のように特化は生じる）」が続縄文文化であり、生業分化が起こったのが弥生文化」（129頁）と指摘した（鈴木2009b）。続縄文文化の要点としては、「威信の漁労の盛行」、「対価獲得への特化」、「第一・二の道具の広域交換」をあげ、これらは「灌漑水稻農耕・農耕祭祀の選択基準としても起動する」（130頁）とした。これらの要点から、「続縄文文化の北海道と弥生文化の東北南部以西とは異なる文化であることは明らかで、北海道と類続縄文文化の東北北部と類弥生文化の東北中部がどのように相違するのかが問題」（130頁）とした。そのため、北海道と東北地方の食糧生産、交換、信仰・祭儀を検討し、相違を明らかにした。灌漑水稻農耕導入については東北北部での導入の誘因として、「従来ある生業に収容力があつたこと」、「内陸という立地」、「コメが域内交換財となること」をあげ、これらは東北北部での「域内交易の変化にあたる」（143頁）と評価した。この生業変更は、北海道より豊かな植物資源（食物摂取比B～D型に表れる）を背景にした「縄文的対応の極相」（143頁）と述べた。東北中南部・東日本・西日本については、「灌漑水稻農耕の効率の低さゆえに耕地拡大の継続は不可欠であり、そのためには後戻りできない方向の生業再編は不可避であつた」（143頁）と評価した。北海道については「東北北部よりも豊かな動物資源（食物摂取比A型に表れる）を背景に灌漑水稻農耕は導入されず、食糧生産が威信の行為や実用財の交換に統御されたため「漁撈狩猟の特化が起こった」（143頁）と評価した。これは、「続縄文的対応（広範囲生業の徹底＝持続可能性の強化）」（143頁）と述べた。

鈴木氏の生業による分類と渡海交易の各段階は、様々な考古学的なモノ・コト・ヒト（物質文化）から検討しており、今後も続縄文研究の課題として継承し、継続して検討していく必要があると考える。

高瀬克範氏はレプリカ法により、北海道・宮城県域の土器に残された圧痕を検討した（高瀬2011）。宮城県域北部と北海道島石狩低地帯北部の限られた資料の検討ではあつたが、縄文晩期～弥生中期・続縄文期前半期の土器に、明確な植物種子の圧痕は認められなかった。本州島東北部の弥生前半期においては炭化種子と土器圧痕の双方からイネが多く検出されているにもかかわらず、宮城県山王団遺跡で栽培植物種子の圧痕が確認できなかったことから、その背景として「弥生期であっても水稻耕作への比重の置き方などに細かな地域差があつた可能性も考慮する必要がある。」とした。続縄文期の北海道島に

については、「ヒエ属利用は想定されてよい」が未検出のため、「今後も十分なサンプル・サイズを確保したうえで検討を継続する必要がある。」とした。

福井淳一氏は北海道のアスファルト利用（福井2010）とサケ利用（福井2019c）について検討している。

北海道のアスファルト利用については、縄文文化から続縄文文化の各時期での利用状況と、産出地と遺跡の距離による利用状況、北海道内の油田とアスファルト産地、アスファルトの科学的分析の見解を検討した（福井2010）。続縄文文化については、縄文文化後期以降続縄文文化前半に骨角器への使用がなされており、「釣針に用いられる例が多いこと」（486頁）を指摘した。また、「弭（ゆはず＝筆者註）の場合、必ずその内部に用いられるなど、器種との相関が明瞭である」（486頁）ことも指摘した

北海道のサケ利用については、近年増大した考古資料全体からサケ利用を俯瞰し、サケ利用の具体的な時間的・空間的な変遷を明らかにするため、サケ科魚類の生態、近世から現代における漁獲状況、サケ科依存体の全時代遺跡出土状況を比較、検討した（福井2019c）。サケ利用の時期ごと、地域ごとの検討による理解としては、縄文文化期では「北海道の大半の地域では、サケ利用が必須ではなく、選択肢の一つにすぎなかったと言える。」（21頁）とした。続縄文文化前半期では「石狩低地帯、中部・南部オホーツク海側、日本海中部の泊、津軽海峡沿岸の茂辺地において魚類中出土主体種となる程度で、縄文文化後半期と大きくは変わらない。」、ただし「高瀬（2014）も指摘するように石狩低地帯の縄文文化期では遺存焼骨にシカが圧倒的多数を占めていたが、続縄文文化期にはサケ主体になる例が多くなり、相対的に利用が活発化したと考えられる。」（21頁）とした。続縄文文化後半期では「石狩低地帯において、焼土中に多量のサケ科焼骨を含む状況が確認される。」とし、「そのような焼土は、群をなし、多数の柱穴、遺物集中を伴う大規模な拠点集落に伴う。」（21頁）ことを指摘した。オホーツク文化期では「前・中期には道北を中心にニシン利用主体であったが、後期になると道東中心にニシン利用主体からサケ利用主体へ変化かがみられる。」、「さらにトビニタイ期にはサケ利用主体となる（福井2014）。」（21頁）とした。擦文文化期では「石狩川水系においてサケ漁偏向に傾斜したが、」、「その目的は青森県域への移出にあったと瀬川（2005）は想定した」が、鈴木信氏（2003）によりながら、「むしろ毛皮などの交易品生産を強化するために、生業を単純化する必要性があったものと考えられる。」（21・22頁）とした。この集成により、「一定程度サケを利用した地域は、縄文文化期からアイヌ文化期に至るまで、石狩川水系と、オホーツク海沿岸中南部に偏っていた状況を示すことができ」、「北海道全域でサケ利用が活発であったのではなく、サケの多量遡上河川が主な漁場となったと言える。」とし、「サケ利用には、河川毎の遡上量や、集落と遡上河川との距離など地域生態系の差が大きく影響していたと考えることができる。」（22頁）と結論づけた。また、漁獲が盛んな時期は「北太平洋に共通なサケ類の増大、環境変動が影響を及ぼしている可能性が高い」ことなどから、「遺跡遺存体の量変動からサケ利用が活発化した続縄文文化後半期（上野1992）、オホーツク文化～擦文文化期（福井2014）もサケ類の漁獲変動の影響でそのように見えている可能性もある」（22頁）ことを指摘し「各地のサケ利用は不変の重要資源利用ではなく、地域ごとの地形や河川、気候などの環境変動に適応した結果であったこと」（23頁）を再認識した。他の事象についても「同様な態度で検討を加える必要を考え」、サケについては、小地域ごとの環境、サケの生態、人類の利用の変遷を検討し、比較していくことも課題とし、「特に通時的にサケ利用が活発であったオホーツク海沿岸中南部の遺跡立地は沿岸に近いため、入念な検討を必要とする」（23頁）とした。

6.交流と交易

鈴木信氏は続縄文文化における物質文化転移の構造を検討した（鈴木2009a）。そのなかでは各遺

物・遺構の具体的な属性をとりあげ、属性に見える文化接触の関係・程度とともに、属性交換と物資交換の関係を考察し、続縄文文化における文化接触の構造を示した。遺物では土器、石器、金属器、遺構では墓制、住居を検討し、道南、道央、道東での属性転移の时期的な方向性を明らかにした。検討は多岐にわたるため、筆者の力量により、すべてを個別に示すことはできない。今後の課題としたい。

ここでは、過去の論考を引用して再検討しているために本文だけではやや理解が難しいと思われる、渡海交易の各段階（424～428頁）についてのみ詳述する。この渡海交易の各段階は、鈴木氏による続縄文文化から擦文文化の東北地域の北海道系土器・墓制と鉄関連遺跡の分布と交易品目からの交易の検討（鈴木2004）を基礎とした、渡海交易の各段階（鈴木2007）について、続縄文文化期の北海道の移出財と移入財から再検討を行い、北海道系土器・墓制の追記を加え、Ⅱ段階を細分し、Ⅲ段階の前半と後半における異なる様相を示したものと考える。鈴木氏は、鈴木氏（鈴木2004）での各期の様相についてⅠ段階（定住型渡海交易の前段）：「後北B式以前は縄文時代以来の緩やかな互酬的交換方式」、Ⅱ段階：（定住型渡海交易の始発期：「後北C₁式～後北C₂・D式は同族意識を前提とし、社会的関係を密にすることで交換方式を強化した」、Ⅲ段階（定住型渡海交易の完成期）：「Ⅰ～Ⅹ期（円形・刺突文土器群期-筆者註）は、定住型交易の安定によって鉄製品の恒常的確保が可能となる。Ⅵ期～Ⅹ期は墓制の融合から判断すると定住型交易の最盛期と考えられる」、Ⅳ段階（定住型渡海交易から滞留型渡海交易への移行期）：「ⅩⅠ期（円形・刺突文土器群期-同註）は倭王権との貢納的交易が始まり、八世紀代は朝貢的交易を行う。九世紀前葉には私交易が拡大した」と各段階にまとめた（鈴木2007：356・357頁）。

これらと表5（413頁）を参照しながら、私の理解による鈴木信・豊田宏良・仙庭伸久氏の土器型式期（鈴木・豊田・仙庭2007）での時期区分を補い、渡海交易の各段階を示すと、Ⅰ段階（弥生時代後期後半以前）（後北B式以前-表5より筆者註）は中継ぎ式の滞留型交易を行っている時期、Ⅱa段階（弥生時代後期後半）（後北C₁式-同）は滞留型交易から定住型交易への移行期、Ⅱb段階（古墳時代前期前葉～中葉）（後北C₂・D式-同）は定住型交易の開始期、Ⅲ段階（古墳時代前期後葉～飛鳥時代前半）（円形・刺突文土器群期Ⅰ～Ⅷ期・Ⅸ～ⅩⅠ期の一部に重なる-同、Ⅰ～Ⅲ期は一部に後北C₂・D式を含む「北大Ⅱ」を含まない「北大Ⅰ」期で、Ⅸ～ⅩⅠ期は「北大Ⅱ」を含まない「沈線文」「北大Ⅲ」・円形刺突文・刺突文・無文土器」期）は定住型交易の完成期、Ⅳ段階（飛鳥時代後半）（円形・刺突文土器群期Ⅸ～ⅩⅠ期の一部に重なる～擦文前期（八世紀代）-同、ⅩⅠ期は「北大Ⅲ」を含まない「刺突文・無文土器」期）は定住型交易から滞留型交易への移行期である。また、Ⅲ段階前半（円形・刺突文土器群期Ⅰ～Ⅲ期）（Ⅰ～Ⅲ期は一部に後北C₂・D式を含む「北大Ⅰ」期-同）は「定住型交易の安定により金属製品の恒常的確保が可能となる」時期、Ⅲ段階後半（円形・刺突文土器群期Ⅵ～Ⅷ期は「北大Ⅰ」を含まない「北大Ⅱ」期-同）は「金属製品の潤沢な供給により利器の鉄器化が進んで石器がほとんど廃用された」時期で、「「かわり」重視の方法（社会的距離を縮める方法）が「もの」の取引に偏った交換関係に変容し始める」時期である。

佐藤由紀夫氏は、東北北部を基軸とした紀元前一千年紀後半（ほぼ弥生時代前期中葉から中期全般）の日本海をめぐる交流と地域社会の変化を述べた（佐藤由紀夫2018）。その中では、苫小牧市タブコブ遺跡30号土坑墓の鑄造鉄斧の再加工品の鉄製品（小型の斧状や楔状）（佐藤由紀夫・赤沼秀男・赤石慎三・岩波連2018）、石狩市紅葉山33号遺跡GP-1・GP-5土坑墓から出土した鉄板状の小片、伊達市オヤコツ遺跡GP-023土坑墓から出土した基底面に金属製品による加工の痕跡が確認できる骨角製釣り針、北斗市茂別遺跡の包含層から出土した金属製品の刃部再生の痕跡である溝条痕が確認される砥石（破壊した磨製石斧の転用品）を提示し、「当該期の道央から道南では金属製品が実用利器として使用された

ことを示す資料が揃っている」（7頁）ことを指摘した。「流通量は不明ながら、工具などの実用品・日常品として一定程度は普及していたと推測」（7・8頁）している。伊達市有珠モシリ遺跡7号土坑墓出土のイモガイ製貝輪と三面石斧などからは、「東北北部の人たちも金属製品・鉄製品の交易にかかわっていたと推測」（9頁）した。新潟市八幡山遺跡からは弥生時代後期の可能性が極めて高い、神居古潭構造帯の緑色片岩製磨製石斧が出土している。新潟方面ではすでに鉄斧の普及が想定される時期であるため、交易品としての価値を有していたとは考え難いとし、「この石斧は交易船の装備品と考えることはできないであろうか。」（10頁）と問題提起した。このように船の装備品と考えることで、交易品とは異なり、ヤウンモシリ島から新潟県方面へという具体的なヒト・船の動きの方向性を示した。このことは、大坂拓氏の恵山ⅡB式に新潟方面に分布する砂山式に類似した要素が認められるようになること（大坂2015）とも整合的なため、「蓋然性はより高まった」（10頁）と考えている。

福井淳一氏は北海道における続縄文前半期の骨角製漁撈具について、それらにみられる過剰装飾を軸に、鉄器加工痕、形態による系譜関係を検討しながら、弥生・続縄文文化の交流・物流を考えた（福井2019a）。鉄器加工痕からは、「初期に流入した鉄器は主に漁撈具を中心とした骨角器加工に用いられたと考えられ、時期は西日本～北陸とほぼ同時期とみられた。」とした。さらに、「漁撈具が副葬品化し、過剰装飾されることから、航海術を持った北海道側漁撈民による交易への関与が推測された。」とした。また、「交易は鉄器などを得るため、アオトラ石製石斧のほかヒグマ毛皮を北海道側産品としたと推定」した。形態による系譜関係からは、「東北中部太平洋側の集団が晩期末葉・弥生前期初頭に北海道南西部へ移住し、漁撈具に外来形態をもちこむとともに、さらに要素合成によってキメラ品を生み出した状況が想定される。」とした。また、「過剰装飾が外来漁撈具・キメラ漁撈具でより顕著であることから、移住系漁撈者が主に流通を担った可能性も考えられた。」とした。さらに今回検討した時期の次段階にあたる弥生後期以降についてもいくつか言及した。今後の課題としては、「多様な視点からの北海道の交流・物流史を検討していくこと」を挙げている（7頁）。さまざまな課題について、これまでの見方だけではない視点からの指摘が行われており、今後も多様な視点から検討していく必要がある。

7.階層差・階層化

鈴木信氏は続縄文文化の階層差について、階層を「階層から階級への変化は経済的な側面が威信的側面を侵食する過程」（鈴木2010：24頁）と定義し、墓制と交易を分析し、「財の集積=富という側面を副葬品から評価することにより、「リーダー」とそれが属する社会の階層化を検証することは一部確認できた。」（40頁）とした。「多頭的階層」（松木2008）については、続縄文期中葉までは「多生業を兼業し、階層間分業が想定されにくい中継ぎ方式の広域交換をおこなうので、専業による分業に基づく多頭的階層があった可能性は低い。」（40頁）とした。また、鈴木氏（鈴木2007）により、続縄文期には、「第一の道具の鉄器化とその集積にみられる「富者と貧者」の差、性差に基づく系譜継承が発生する。次の段階として9世紀代擦文期に渡海交易の隆盛により多機能をこなす「長」が出現する。」（41頁）と明示し、「これらの変容を経て階層化が明瞭になっていくものと考えられる。」（41頁）と結論づけた。また、「副葬品からみると続縄文期は蓄財において個人的であり、後代とは異なり財を秘匿する文化であった可能性がある。」（41頁）ことも指摘している。

分析した資料は遺構・遺物・葬法と多岐にわたっており、これらの指摘の蓋然性は非常に高いと考える。

藤原秀樹氏は北海道における縄文・続縄文時代の子供の埋葬を検討し、「北海道における子供の埋葬からは、縄文後期と晩期後葉～続縄文初頭が画期となり、各時期の具体的様相は異なるが、複雑化と単

純化を繰り返し、全体として次第に複雑化する（山田2010）ような階層化傾向が伺える。」とした（藤原2019）。「但し、山田のⅢ段階：埋葬小群が複数存在し、特定の埋葬小群に稀少性や付加価値の高いものが集中する（山田2014：233-235頁）状況を後者（晩期後葉～統縄文初頭-筆者注）に見出すことはできず、職能毎の階層分化に留まっていた可能性が高い。」とした（17頁）。また、郷文時代以降の子供の埋葬についても検討し、「当該期の社会における階層化や首長制についての統一的な見解は無いが擦文時代に何らかの格差が存在し、オホーツク文化期は階層の存在もそういされるような状況であると言え、社会的地位の世襲が伺えるような幼児への厚葬出現や子供間格差の拡大化・固定化傾向と整合性があり、首長層の世襲を推測させるようなアイヌ文化期の隔絶した小児への厚葬へと繋がるようだ。」（18頁）と展望を試みた。

8. 資源と土地利用

高瀬克範氏は近年の統縄文文化の研究動向と課題を整理する中で、統縄文文化研究の第1の問題点として「統縄文を縄文の一部にふくめる立場、縄文とは切り離して捉える立場、どちらの立場もまだ統縄文の特色や縄文との関係を経済のデータを通して具体的には描き出していない」こと、第2の問題点として「統縄文文化内で生じた変化のダイナミクスに関する理解がほとんど進展していない点」を指摘した（高瀬2014）。第2の問題点については、「統縄文後半期における石狩低地帯の優位性の出現理由がまったく解明されていない点が、これを端的に示している」とし、鈴木信氏の研究（鈴木2009a・b）が「統縄文前半期においては北海道島内の各地域が多方向・双方向に影響関係をおよぼしあっているのに対し、後半期以降（後北C₂-D式以降）にはほぼ一貫して道央部が遺物・遺構の属性変化のイニシアティブをとるようになることをはじめて属性分析を通して明らかにした事例」として評価した。しかし「なぜ道央部の優位性が出現したのかについては言及されておらず、学界のなかでこれ自体が課題であるとの認識もまだ定着していないと思われる」とした。そのため、ひとつの試みとして資源・土地利用を視座とし、生業と交換、本州島東北部との関係を検討した。生業では植物資源の利用、動物資源の利用、漁労の地域差を検討した。交換では石狩低地帯の役割と利器の外部依存、居住の問題、集団の移動範囲、儀礼体系、本州島東北部との関係では東北北部の地域構成と北海道島との交渉、東北北部のカタストロフィー（自然界や人間社会の大変革、突然の大変動、大きな破滅、深刻な参事など-筆者註）、雑居地帯としての東北北部を検討している。

検討は多岐にわたるため、筆者の力量により、すべてを個別に示すことはできない。「資源構造」や「資源構造のなかで利用できる領域を拡げたことを「資源構造の拡張的開発」（expansive exploitation of resource & 拡張された資源を「拡張開発された資源」（expansively-exploited resource）」の定義が示されたことや、資源構造の拡張的開発については、「サケ科利用と結びついた沖積地への進出は、統縄文文化前半期の石狩低地帯ですでにみられたもの」として、「統縄文文化前半期の多様な資源の拡張的開発方法のひとつにすぎなかった石狩低地帯の資源利用方法を基盤として、後半期に地域差が解消されていく」という方向性を示したことなど、問題提起も数多くなされているため、今後の課題としたい。

9. 概説

青野友哉氏は統縄文文化について、統縄文文化の範囲と小地域文化区分、土器編年の整理、統縄文文化の生業・集落・墓、弥生文化圏との交流を検討し、総体的に示した（青野2011）。これらの検討を通して、「個々の研究者は、自らがこなった文化評価により、一つの文化や地域を偏見にさらしてしまう危険性をもっていることを自覚しなければならない。今後の統縄文文化・弥生文化研究は、高瀬（高瀬2004-筆者注）の言う「国史の枠組みを対象化し、それとの距離のとりかたに慎重になること」、

「『文明』にとって都合がよい理論に疑問を呈してゆく批判的な態度」をもつこと、の二点を肝に銘じておこなう必要があろう。」とした。

木村高氏は東北地方の縄文文化について、これまでの東北地方での研究を俯瞰しながら縄文に由来する遺物・遺構を検討し、概要を示した（木村2011）。

鈴木信氏は北海道の縄文文化について、これまでの検討を踏まえ、文化要素の変遷（遺物・遺構）生業、墓制からみた階層表現を検討し、概要を示した（鈴木2011b）。

III. 縄文文化と縄文時代の時代区分

ここまでは、主に個別研究の現在の状況をみてきたが、これらの検討からえられてきた「縄文文化」と「縄文時代」の時代区分については、現在も様々な捉え方と用い方があるため、検討する。

山内清男氏により示された「縄文式以後」（山内1937・1939）である「縄文式」（山内1939：47頁）は、近年では「縄文文化」と「縄文時代」について、横山英介氏による定義への疑義（横山1990）と鈴木信氏による立場の表明（鈴木2009）、西脇対名夫氏による北海道の考古学の時代区分の特徴としてのまとめと問題提起（西脇2010）、高瀬克範氏による学術的な捉え方（高瀬2014）、加藤博文氏による民族考古学による検討（加藤2020）がある。なお、小杉康氏は現在の研究の進展から、

「ことさら「縄文時代」や「縄文時代」といった年代観をも示し得る用語を用いる必要はないと思います。」（272頁）として、縄文時代について、縄文文化縄文期とする（小杉2011）。このような用法については、例えば、様々な文化・社会において、文化・社会変容などの大きな影響を与えてきた鉄器がその文化内に確実に存在している縄文文化後半期までを含めて縄文文化とするようなごく単純な疑問があり、これまでの研究史には合致しないため、ここでは検討から除外する。

そのため、各氏の論点をまとめ、私の検討による見解を示す。

1. 横山英介氏による縄文文化と縄文時代についての疑義（横山1990）

横山英介氏は、縄文時代・文化について、「①その開始を本州東北部の弥生時代に並行させたという性格上、いわゆる画期を抽出し与えた時代区分名ではないこと。」、「②現在まで出土している土器や石器などの遺物、あるいは竪穴住居跡や土壌墓などの遺構で、縄文文化の晩期と比べ画期を抽出することは非常に困難である。」、「③地域性は大きくみて、渡島半島部など道南西部、石狩低地帯、道東北部の3つに分けられる。前2者は、地理的にみて、弥生文化の影響が及びやすかったことは確かであ

る。」、「④特に①、②からみて、時代区分名としてはふさわしいとは思えない。むしろ、縄文時代のなかの時期区分とみなしたほうがよいように思う。」「⑤そうなると、北海道の縄文時代・文化は、次の擦文時代・文化のはじまる西暦7世紀まで続いた、とみなすことができよう。つまり、縄文文化はその開始も終了も本州島北部などの地域よりおくれたところに大きな特徴を見い出せる。」と5点を示しまとめた（横山1990：10・11頁）。

2. 鈴木信氏による立場の表明（鈴木信2007・2009b）

鈴木信氏は「縄文時代」について、「縄文式以後の縄文が付される土器のある時期は「縄文時代」といわれる」（鈴木2009b：143頁・註1）と述べ、現状では用いない。用いない理由としては「土器製作技法・組成の変化は細かい時間の推移を表す。だが、時代変化のどの仕組みに依拠しているのかは未解明であり、両者が1：1対応の因果関係であるかも不明である。」とする。「旧石器時代」や「縄文時代」、「弥生時代」、「古墳時代」、「鎌倉時代」、「江戸時代」など、通常用いられる日本歴史の

時代区分についての言明はないが、他の論考も含めて、管見では「弥生時代」、「古墳時代」、「江戸時代」は用いている。また、「筆者は時代区分の根拠を土器製作技法・組成のみに求めない。区分は遺構・遺物の検討を経て「文化期」として細分し、政治史的色彩の濃い「〇〇時代」の付与は他分野の比較研究を交えて行うべきである。」とも述べる（鈴木2007：383頁・註1）。

3. 西脇氏による北海道の考古学の時代区分の特徴としてのまとめと問題提起（西脇2010）

西脇氏は日本流の「時代」区分である「三時代法」の体系について、1930年代以降に「この体系は日本人が著しく民族主義nationalismに傾倒した「時代」の産物であり、「弥生式時代」の主張は民族nationの起源の探求と結びついていました。しかもそれが1945年の敗戦を契機に学校教育や文化財保護など公的な分野で急激に普及したことは日本特有の事情であるといえるでしょう。」（183頁）とする。また、山内清男氏の見解への理解として、「山内の書いたものを読むかぎり、彼自身は「続縄紋式」は文字通り「縄文式」の「続き」であり、全国に分布する早～晩期縄紋式の5大別にくわえて北海道だけに6つ目の大別がある、と考えていたと思うのですが、いつの間にやら北海道では縄文時代の後に「続縄文時代」が来ることになってしまいました。」（183頁）とした。この点については、「縄文」と「続縄文」が別の時代であるという認識は、北海道教育委員会1973年から採用した埋蔵文化財包蔵地カードの様式が関係していると推定している。それに引き続き、藤本強氏の「対照表」（藤本1988）を紹介し、擦文・アイヌ文化へと続く「漁労」の伝統が確立するということを続縄文「文化」の特質として重視しようとした考え方とした。「したがって、この表では、考古資料は残した主体が重要とみる考え方であるといえる。」（184頁）とした。そして、「『もう二つの日本文化』とは、北海道と南島の「文化」のことですが、どうしてその二つは「日本」の文化であると言えるのか。それは「中の文化」と同じ日本列島に存在する二つの地域の遺跡や遺物への理解が読者にとって重要であることを主張するためでしょう。」とし、「時代区分に対する見方を通じて、北海道の歴史の独自性を考えることができます。」（184頁）と述べた。

4. 高瀬克範氏による学術的な捉え方（高瀬2014）

高瀬氏は、縄文文化や弥生文化は、「世界標準でいうところの考古学的文化（「共存諸型式の常時的組合せ」（チャイルド1956））ではなく、それらをいくつも集めた「考古学的大文化」とでもいうべきもの」とする。そのため、縄文文化と弥生文化はテクノコンプレックス（Clarke1968）以上の水準（レベル）におけるゆるやかなまとまり・考古学的なまとまりと考えることができた。続縄文については、森田知忠氏による恵山文化、チプスケ文化、江別文化などの整理（森田1968）の方向性から、その単位は少なくとも複数の考古学的文化を包摂する文化グループ以上の水準に相当する点を確認した

5. 加藤博文氏の民族考古学による検討（加藤2009・2020）

加藤氏は「先住民考古学」（加藤2009）の視座により、アイヌ民族と先住民考古学の検討を進めている（加藤2020）。北海道考古学とアイヌ民族については「研究者は真摯な反省と信頼の回復からしか新たな関係が生まれえないことを自覚する必要がある。」（537頁）と指摘した。脱植民地化と時期（時代）区分については、簗島栄紀氏（簗島2018）と関根達人（関根2016）、瀬川拓郎（瀬川2007）によりながら、「そもそも北海道の時期（時代）区分には、時空間的に物質文化単位で集団を捉える考古学的文化と、社会経済段階として区分される時期（時代）区分とが混在している。」（540頁）ことを指摘し、「北海道の先史文化については、縄文文化、続縄文文化を含めて時代区分の名称について未整理の課題が数多く残されている。」（540頁）と整理した。北海道の歴史については「アイヌ民族の祖先集

団が長い時間的な経過の中で構築してきたもの」（540頁）という理解から、「アイヌ民族の歴史を反映させた北海道の考古学的な編年はこのような基礎的な理解に立ち返り、地域単位の文化集団の変遷に基づきつつ、それぞれの時期の社会経済的特質を反映した時期（時代）区分をアイヌ史として再構築する必要がある（図2）。」（540頁）とした。新規に登録する遺跡名や報告書に記載する遺跡名については「遺跡の登録過程において、担当する考古学者が遺跡の所在する地域のアイヌ語地名に配慮し、遺跡名をアイヌ語に由来する地名で登録することで、遺跡はアイヌ語地名と深く結びつけて記録されることになる。」とし、「このような取組もまた文化的景観を通じた脱植民地化と言えよう。」と述べた。

6.私の理解と検討による見解（図8～12）

私は、続縄文時代は、学史的には、山内清男氏により縄文時代に続く「縄文式以後」の「続縄文式」の土器（現在の室蘭周辺の恵山式（本輪西貝塚の土器）と江別周辺にみられる後北式（江別式））と貝塚、竪穴式墳墓（名取武光1933、後藤壽一1933、河野広道1933）をもとに「縄文式以後」の「続縄文式」として区分され（山内1937・1939）、その後に高度の漁労狩猟民としての性格が追加され、弥生文化に対置して一連の文化として「続縄文式文化」を認識していたと理解する（山内1969）。当初の続縄文研究から、山内氏は「続縄文式」の土器と貝塚、竪穴式墳墓という複合的な文化要素を検討し、それ以後の研究者は検討する内容やそれぞれの見解の違いはあるものの、現状ではこれまでに検討してきた総体として、「続縄文文化」の枠組みが示されてきたことにより規定され、「続縄文時代」を時代区分していると考え。

しかし、続縄文文化と続縄文時代の区分については、横山氏の指摘する問題点は解決していないと考える。横山氏の「続縄文」については、その後の記述では「続縄文期」を用いているため、現在の縄文時代の6期区分の晩期に続く、縄文時代の7期目として理解する。このことから、現在は、「縄文式」の「縄文文化」・「縄文時代」には、ヤウンモシリ島の上に「縄文式」の「縄文文化」・「縄文時代」の6期目の晩期に続き、7期目には「縄文式」の「縄文文化」・「縄文時代」の「続縄文式」の「続縄文期」に「続縄文文化」（または「続縄文式」の「縄文文化」・「縄文時代」の「続縄文期」に「続縄文文化」）があり、それが6世紀後半まで認められる、という認識となる。この認識による限りは、「続縄文文化」は「縄文文化」に内包されることになり、「縄文文化」のなかでの、晩期に続く多様な「地域文化」の一つとなる。このことは、前述の高瀬氏による整理とも、現状では矛盾しない（高瀬2014）。

しかし、私は、続縄文時代初頭の土器群の検討と地域の歴史を考える立場から、「続縄文文化」は「縄文文化」や「弥生文化」などとは異なっており、それらに対置するものとしての「同質の文化」と考える。そのため、「続縄文文化」と「続縄文時代」を区分する2つの理由を述べてみたい。

(1) 続縄文時代初頭の土器群の検討から

「続縄文時代初頭の土器群」について、型式と細別器種による様式の様相により検討し、「続縄文時代初頭の土器群」が「縄文時代晩期の土器群」と異なる独自の様相を示すことを指摘し、それをもって続縄文文化と続縄文時代を画し、区分する（佐藤2011・2014）。以下に、「続縄文時代初頭の土器群」の縄文時代晩期の土器群と異なる独自の様相の特徴をまとめて、その画し、区分した理由を述べる

型式論としては、①深鉢の主要な文様帯（Ⅱ文様帯）が幅の広い文様帯になること。②主要な文様には、変形工字文やそのモチーフを縄線文や刺突列（列点）、帯状縄文で表現したと考えられるものが多くみられること。このことから、文様のモチーフには東北地域の影響が強くみられるが、独自のものがある。③深鉢の底部は、3期に時期区分したうちの、晩期以来のあまり出ない凸底が当初（1期）は主体的であったものが徐々に減少し、平底は一定量みられ（1～3期）、やや上げ底はその中葉以降（2～3

期)にみられる。

様式論としては、④縄文時代において、徐々に種類を増やし続けてきた細別器種の構成が、「続縄文時代初頭の土器群」では中型から大型の深鉢類(深鉢A～F)と、小型の鉢類(鉢A～H)を主要な細別器種とし、中型から大型の甕類と壺類(壺A・広口壺A・B)、台付鉢(A)を構成するという、種類の少ない細別器種の構成になること。⑤細別器種に外来系土器の甕類(甕A・B)と鉢類(鉢C・F・G・I)、台付鉢を構成すること。このことから、細別器種の構成には東北地域北部の影響が強くみられる⑥主要な細別器種である深鉢類の成形は、③より在地の技法を主として行われている。このことから東北地域北部などの他地域からの大規模な集団移住などは想定できない。

これらのことから、このような土器群を「続縄文初頭土器群様式」とし、ヤウンモシリ島の在地の社会が、東北地域北部からの影響を受けつつ、主体的な選択により独自の土器様式を形成したと考える。このような細別器種の少ない構成は、用いる道具類を少数に厳選していることから、簡易な移動式の建物(テント状など)を用いて集住する、狩猟・漁労・採集を中心とする遊動的な集落社会(石井淳1998)に適していると考える。そして、このような細別器種の少ない構成は、内容は変化しながらも6世紀後半まで続く。また、土器群と建物の検討により、このような社会は、6世紀末以降に「前期擦文式土器様式」を用いて、造りつけ竈を持ちしっかりとした掘り込みのある竪穴住居を用いて集住する、定住的な集落社会を形成するようになり、このことから擦文文化・擦文時代がはじまると考える(佐藤2020a, n.d.b)。「前期擦文式土器様式」は本州島東北地域の栗岡土器様式と北部栗岡土器様式に類似するが、主要な甕類は在地の系譜を引くもので、在地の社会が主体的に選択した細別器種の構成を持つものである。そのため、「続縄文初頭土器群様式」は、これ以後にそのような社会を形成していく一つの方向性が発現していると捉え、また「前期擦文式土器様式」以後に別の社会の形成が始まることからそれらから得られる縄文社会と続縄文社会、擦文社会の生活の仕方の違いをもとに、縄文文化と続縄文文化、擦文文化の違いを区分する。なお、宇田川洋氏によれば、縄文時代晩期の竪穴住居は浅いくぼ地を多少改変するものや浅い掘り込みを持つものであり、続縄文時代初頭の竪穴住居もほぼ同じような構造である(宇田川1982)。これらも縄文時代後期に比べれば、より非固定的・非定住的ともいえる。しかし、縄文時代晩期とそれに後続する土器群との比較による、続縄文初頭土器群様式にみられる、用いる道具類の厳選(細別器種の構成の減少とその継続性)にその社会のあり方や目指す方向性が反映していると考え、その画期を設定する。このような社会の捉え方は土器群のみの分析から得られるわけではなく、前述した遺跡のあり方や、これまでの続縄文文化の遺跡の調査や集落論など多様な研究の成果とその共有によっている。

私の理解によれば、鈴木信氏の続縄文文化についての一連の検討(鈴木2003・2004・2007、2009a・b、2010・2011bなど)は、その文化の枠組みを土器群と土器型式でとらえ、それらの土器群と土器型式から設定した時期により時間軸を切り分ける。そして、規定する属性(内在的属性など)の分類をもとにそれ以外の遺構・遺物とその属性について、切り分けた時期やそれをまとめた段階ごとに検討することにより、文化と特にその内部での変容について、連続的に説明する。また、時としてその検討は、遺構・遺物の別の属性の検討により、擦文文化とアイヌ文化(アイヌ文化期を用いていることにより、近代以前の「考古学的な」という意味と考えられる-筆者註)、その擦文文化期とアイヌ文化期に及ぶ。

私は、その土器群の検討から得られる社会のあり方から文化を区分し、時代区分として説明し、位置づける。そのため、ここでの縄文文化と続縄文文化、擦文文化の区分は、縄文文化、弥生文化、古墳文化との地域的(水平方向、横軸)な区分と時間的な(垂直方向、縦軸)区分であり、前述した遺跡のあ

り方も含めて、山内氏による「弥生文化と併行する縄文文化」の規定とその延長から離れ、それぞれを再規定した。そして、「時代区分」についてはそれぞれの文化の社会のあり方により区分して定義しそれぞれの文化を縄文時代、縄文時代、縄文時代という時代区分とする、考古学的方法による歴史学における時代区分のひとつの考え方として、新たに示す。

西脇氏による問題提起に率直に答えるならば、考古学的には、前述したようにヤウンモシリ島の土器様式と建物の検討で得られた地域社会の広がりとその年代の違いによる「縄文文化と縄文時代」の区分によれば、遺跡や遺物を残した人々とその社会には「継続性」はあるが、前後の「時代」との間に「同一性」は有しないし、周囲の地域の遺跡・遺物との間にも「同一性」は有しないと考える。

(2)地域の歴史を考える立場から

鈴木氏は、前述のように「政治的色彩の濃い「〇〇時代」の付与」は「他分野の比較研究を交えて行うべき」として「文化期」として細分し、時代区分を留保した（鈴木2007・2009b）。

私は「政治的色彩」の濃淡をもって時代を区分しないことも区分することも、それらを区分の理由のすべてや主とすることを理由として日本列島における考古学的な時代区分を留保することも、地域の歴史を考える立場から、同意できない。私は、考古学は歴史学の一員と考えており、日本の歴史学においては、日本列島のそれぞれの地域（ヤウンモシリ（北海道）島と周辺諸島、本州列島、南西諸島の各地域）の歴史を叙述する（語る、言葉にする）際にはそれぞれの地域において主体となる人々を中心とするため、現状の考古学において、それぞれを内容も時期も異なる文化（日本列島における「考古学的大文化」）と捉えるのであれば、歴史の叙述はそれぞれの文化により規定する時代区分名を用いて行うのが公正と考え、日本歴史の叙述に倣い、歴史叙述を行った（佐藤2020a・b、n.d.b）。

これまでの日本の歴史学は和人の人々（和民族（佐藤2020b））の歴史を中心に叙述してきたため、それぞれの異なる文化の「具体的な歴史の叙述の仕方」そのものはあまり検討されずにきた。しかし、少なくとも、現在の日本という国民国家では、ヤウンモシリ（北海道）島とヤンケモシリ（樺太、サハリン）島、ポロモシリ（千島列島、萱野茂1980）列島にはアイヌの人々（アイヌ民族）が、南西諸島には琉球の人々（琉球民族）というそれぞれの先住民族が過去を含めて存在しており、和人の人々（和民族）は本州列島に由来する。このことを前提にすれば、和人の人々（和民族）について「～時代」を用いて主体的に歴史を叙述するのであれば、アイヌの人々（アイヌ民族）と琉球の人々（琉球民族）についても同様に、「～時代」を用いて主体的に歴史を叙述することは、歴史の多様性を示す意味では通常のことと考える。これらは、日本の歴史学における各時代区分に等置するものとして考えることであり本州列島に由来する人々についての「弥生時代」や「古墳時代」など、南西諸島に由来する人々についての「貝塚時代」や「琉球王朝時代」などを用いることと同様である。歴史学や考古学による時代区分については多くの諸説があり、紙幅の都合と私の力量不足により、ここではそれらには触れない。またこれら以外の方法による時代区分を否定するためのものではない。しかし、少なくとも現在の歴史学や考古学において、研究者により共有される一般的な時代区分（縄文時代、弥生時代、古墳時代、江戸時代、貝塚時代、グスク時代など）と比較して、そこに求められているいくつかの最低限度の水準や基準とすることができるような地域的・時間的な考古学的なまとまり（モノ・コト（物質文化）からえられる文化・社会）や「考古学的文化」は、これらの記述により研究者間に共有されると判断し、区分する

このように、歴史研究のうえでもお互いを尊重し合うなかで、現在のヤウンモシリ島を中心として、濃淡を持ちながらモザイク状に生活する、これからのアイヌの人々と和人の人々の「共生」を考えていくことが今後にも求められると考える。そして問題があるならば、解決するための努力を今後も継続していきたい。特に考古学は、それぞれの遺跡のあり方（遺物・遺構などを含めて）を対象とするため、

地域の歴史をより直接に物語るものであることから、地域の歴史に対しては、より責を負っていると考える。私は、1980年代のアメリカを中心とする一部の考古学や人類学のように、考古学的文化に偏重し固執し、それを矮小化させてしまい、その主体である人々の現在までの歴史として資料を位置付けないのであれば、それは歴史学としての考古学とは言えないだろうと考える。これらのことはそれぞれの地域の人々の歴史の矮小化を招きかねないため、これまでの自戒も込めて、特に指摘したい。

高瀬氏による「縄文文化」は研究上の規定であり、「縄文文化」の規定について異論はない。ただし、前述の理由により、現在の日本の歴史学・考古学の状況からは、それぞれの地域の「歴史を叙述するための用語」として「縄文時代」を用いる必要があると考える。高瀬氏も指摘しているが、「北海道島でさえも、和人もしくはそれに直接連なる集団でなければ時代を形成してはならないという、偏った基準が日本考古学のなかに横たわっているのである。」（高瀬2014：51頁・註1）と述べる。このような研究の現状があることから、むしろ、あえて、私は「縄文時代」を用いる。もし仮に、日本の歴史学・考古学が、「縄文時代」や「弥生時代」、「古墳時代」、「奈良時代」、「江戸時代」などの時代区分を用いた歴史叙述を行わないのであれば同意するが、それは今後も起こらない、もしくは当面は期待できないと考えるため、私は今後も用いないことには同意できない。

また、高瀬氏は考古学的文化を重視することについて、「生態論、資源利用論、行動論などを組み込んだ研究が数多く生み出されている現在、文化概念の重視によって文化史的アプローチで満足するような研究の方向性が強まるとの懸念は不要であろう。」（高瀬2014：51頁・註3）とする。確かに、「研究の方向性が強まる」懸念はないのかもしれないが、このことは後述する「擦文文化」、「アイヌ文化期」の問題でもあり、ヤウンモシリ島について、文化と時代区分、歴史を「どのような立場」で考えるかに関わってくる課題と考える。実際の「研究」の場において、「縄文時代」や「弥生時代」、「古墳時代」、「奈良時代」、「江戸時代」などの和人（和民族）を中心とする社会や文化をもとにした時代区分を用いた歴史研究とそれを用いた歴史叙述が問われることは少なく、再生産は続いている。例えばなぜ同じ研究書のなかで、「弥生時代の弥生文化」や「古墳時代の古墳文化」の記載は不問で、「縄文文化」の独自性や「縄文時代」の時代区分は問われ続けるのだろうか。なぜヤウンモシリ島の近世併行期の歴史叙述は、「江戸時代の松前藩は～」という松前藩の歴史叙述からはじまるのだろうか。そうではなく「江戸時代のアイヌの人々は～」や「近世のアイヌの人々は～」などとアイヌの人々の歴史から叙述がはじまっても、「江戸時代」や「これまでの近世」を用いるのであれば、解決はしていない。また、それらは「縄文文化」について、中立的に、考古学的に正しく位置付けさえすれば、今後に解決するのだろうか。

これらのことが続くのは「研究」と、それをもとにした説明、解説が不足しているからではなく、「研究」における「歴史叙述の仕方そのもの」が問われていないためだろう。このことを解決しないまま、「近世アイヌ文化」などに言い換えても、それはあくまで「和人（和民族）を中心として叙述（記述）する日本史」と本質的には変わらないと考える。李成市氏の述べる、現代の「日本歴史」が目指すものはそうではないだろう（李2014）。そして、このような歴史叙述は、研究書のみならず、論文や論考、評論、概説、一般書、教科書など、歴史を対象とするあらゆる場面で遭遇することから、一般の人々の理解にも強く影響していると考えられる。

私は「研究」と「現代社会」を切り離して考えることはできないし、留保もできない。私は、一人の和人の研究者として、現在の「研究」の目的とする「課題」と、未来を見据えた「現代社会」における「課題」を切り離して考えることはできない。私は「～時代」を用いた区分には、このように日本歴史の多様性を示す新たな可能性があると考えている。このことは世界の考古学や歴史学から日本考古学や

日本歴史だけを区別して考えるような、自国主義的な歴史観を目指すものではない。そのため、現在の考古学が「縄文時代」などの時代区分を用いずに、「縄文文化」などのみを用いることに固執することは、現代的な意味での歴史研究とはいえないのではないだろうか。高瀬氏は「本稿で筆者が提示したような縄文文化像とその歴史が将来的に成功裡に描かれたとしても、それが一足飛びに古代蝦夷・中世蝦夷やアイヌの形成過程の解明につながるわけではない点を強調」（51頁）しており、古代蝦夷・中世蝦夷やアイヌの形成過程の解明に対して慎重である。私はそのような課題に対して、積極的に寄与し、どのように考えることができるかを「公正」に示すことが現在の研究には必要である点を強調したい。私もこれらのような歴史的な過程は一足飛びに解明されるとは考えていないが、このような高瀬氏の述べる「中立的」な慎重さと、私の指摘する「公正」は両立できると考える。必要なのは、日々の検討だろう。そのため、歴史的な過程については、短いながらも具体的な叙述を試みている（佐藤 2020b）。

西脇氏は「とはいえ、北海道の考古学についていえば、明らかに「時代」という言葉を避ける傾向があります。縄文・^{さつもん}擦文・アイヌという北海道流の区分に「時代」がつくことはむしろ稀」（西脇 2010：184頁）とする。西脇氏は行政での取り扱いについて前段で指摘するが、行政の一部を担う公益である、私の所属する（公財）北海道埋蔵文化財センターの使用する年表は、これまでも「縄文時代」は「常」に「調査年報」などで用いており、埋蔵文化財保護行政では「稀」ではなく「常」である埋蔵文化財保護行政が考古学ではないというのであれば別ではあるが、私は、埋蔵文化財保護行政は考古学の一部を担っていると考えるため、このような指摘は埋蔵文化財保護行政と考古学を分けて考える立場のようにも思われる。行政を憂うのであれば、積極的な改善が求められよう。

私はこれまでに述べてきた2つの理由から、このような年表の時代区分の名称に「擦文文化期」と「アイヌ文化期」があることのほうが歴史的・社会的（行政・司法・立法）に「公正」ではないと考える。そのために、いつになっても「北海道にはアイヌ民族はいつからいたのですか？」などの質問が、研究者にも、社会的にも寄せられるのだろう。私はこのような質問には、相手が小学生であっても大人であっても、社会的にも「考古学的には、私も含めて和人（和民族）の人々が旧石器時代から本州列島で暮らしてきたように、アイヌの人々（アイヌ民族）も旧石器時代からヤウモンシリ（北海道）島で暮らしてきたんですよ。」と「常」に答える。また、「ただ、旧石器時代と縄文時代は本州列島（南西諸島を除く）の人々と同じような生活や社会だったものが、いまから2,300年前（紀元前3世紀）頃以降にヤウモンシリ（北海道）島の人々は独自の社会・文化を形成し（作り上げ）始め、縄文時代とは異なる縄文時代が始まります。」と「常」に説明する。このように、地域で必要とされている私たちができることは何か、どのように答えていくかが問われていると思うため、少しでも参考になればと思う。

現在の地域の文化財や歴史教育、社会教育などを担当する方々のうち、「縄文文化」のみを用いる方々は、どのように質問に答え、地域の歴史を語るのだろうか。もし仮に「北海道は「～文化」を用いていて、北海道は本州とは異なる文化を持っています。」と答える時には、何を含意しているのだろうか。その質問に対する答えは、考古学だけを別にするだけで「説明したことになっているだけ」になっていないだろうか。その説明は現代の考古学的に、社会的に公正だろうか。なぜ文化財担当者の多くは各地方自治体の教育委員会に所属しているのだろうか。

このような問いに対しては、加藤氏の「民族考古学」による検討（2020）は、海外の民族考古学的な研究に根差した理論と倫理観は非常に共感するところが多く、今後の指針として参考になる。これからの研究は、手法や方法とともに、特にその倫理観が大きく問われていくと考える。加藤氏も指摘するよ

うに、それらを不問とすることは出来ない。具体的なアイヌ民族の歴史の叙述では、今回は海外の引用文献（加藤2018）にあたる事が出来なかったため詳細は不明であるが、今後も重要な論点が含まれていると考える。試案とする歴史年表においては、時期による「社会経済的特質の反映」した「評価（もしくは象徴）」が示された点に大きな意義があり、時期的なまとまりの説明を行う場合には単語化してあるため、非常に理解しやすいのではないかとと思われる。考古学的にはどの区分の階層も「期」が用いられることから、主には「時代区分」ではなく、それぞれの「期」は「社会経済的特質の反映」した「評価（もしくは象徴）基準」による「時期（時代）区分」となることに特徴がある。また、新規に登録する遺跡名称について取り組みは、これまではチャンなどを中心としてきたが、それ以外にも厚真町（厚真町教育委員会2006など）などでは行われてきており、これからも意識して増やしていくことが望まれる。また、厚真町ではこれまでの遺跡名称のいくつかも変更の対象としており、過去の登載遺跡名称についても変更は可能であることから、各地方自治体の担当者は意識して検討していくことが必要であろう。

ただし、ここで実際に区分している「アイヌ史」としての「期」は、「考古学文化」や「簗島（2018）」として引かれている簗島栄紀氏による検討の線とはほぼ一致している（細石刃文化と石刃鎌文化のあいだの「土器」と、「縄文文化」と「続縄文文化」を区分する線がないことを除いて）ことから、これまでのヤウンモシリ島で用いられてきた考古学的な「文化」、「時代」、「期」、日本の歴史学・考古学で用いられている区分を主に用いて、「複雑狩猟・採集民期」や「集団移動・採集民期」などの「社会経済的特質の反映」した時期（時代）区分を行っていると思定できる点には注意が必要であろうと思われる。

引用文献にあたれず、これ以上の検討はできないため、今後の課題としたい。

(3)小結

これらの考古学的な検討と地域の歴史を考える立場から、私は、当該期のヤウンモシリ島の資料の検討の際に用いる、考古学的な文化の時間的・空間的なまとまりを規定する枠組みとしての「続縄文時代」の時代区分は有効と考える。地域の歴史を考える立場からは、「続縄文文化」により規定される「続縄文時代」は、歴史叙述はそれぞれの地域の歴史の主体者を中心に行う必要があることから、「論文」や「論考」、「評論」、「概説」などにかかわらず、他の時代区分と同様に用いる必要があると考える。また、区分する時代の文化と範囲、内容は異なり、それぞれは独自性があることから、「弥生時代の弥生文化と続縄文文化」と並置は出来ない。そのため、「日本列島と周辺諸島における地域固有の異なる文化としてのまとまりである、続縄文時代の続縄文文化と弥生時代の弥生文化、貝塚時代の貝塚文化」などと明確に歴史と文化の多様性として分類・区分し、叙述（記述）していくことが、新たに歴史学としての多様性を示すことになると考える。

そして、「擦文文化・擦文時代」と、これまで「アイヌ文化期」としてきた、瀬川拓郎氏による「ニブタニ文化（瀬川2007）・ニブタニ時代（瀬川2016）」についても同様と考えることから、意図については同意し、どちらも用いていきたい。私は自身の経験（佐藤2020a・b）からも、瀬川氏の「ニブタニ文化」と「ニブタニ時代」は具体的な歴史叙述を行う必要性から生まれたものと推察する。続縄文文化の調査・研究は、昭和初期の現在の江別市周辺での調査・研究（名取武光1933、河野広道1933、後藤寿一1935など）により国内に広く知られるようになった。また、「江別」の由来となるアイヌ語についての定説はないものの、江別市史（高倉新一朗1970：88頁）や江別市観光協会のホームページなどによれば、「ユベオッ（鮫のいる川）」が筆頭に挙げられることが多いため、他よりも一般的なものと考えられる。これらのことから、瀬川氏に倣うのであれば、ここでの「続縄文文化」と「続縄文時代」につい

ては、「ユベオツ文化」と「ユベオツ時代」と呼び変えることを一案として示す。

ただし、「ニブタニ文化・ニブタニ時代」の具体的な内容については、今後、考古学的に検討していかなければならない課題は非常に多いと考える。ニブタニ文化は12世紀後半（または13世紀）から19世紀末までにわたっているが、私は、特に時期区分に確定したものがないことは今後の課題と考える。そのため、現状では時期は、「～世紀のニブタニ文化」や「ニブタニ時代の～世紀」、「ニブタニ時代の中世併行期」などといった記載が考えられる。また、鈴木氏が検討（鈴木2007）し、高瀬氏（高瀬2014）や松田氏（松田2010）も続縄文研究で指摘したような、具体的な資料にもとづく社会組織や集団の分析は急務であり、それによる文化や時代区分も継続して検討していく必要がある。

私は現状ではここまで検討した「ユベオツ（続縄文）文化」と「ユベオツ（続縄文）時代」の定着（固定化）をこれまでと同様に望みたいが、前述のように歴史学や考古学などによる文化と時代区分は現代的な課題も含むことから、これらの文化と時代区分はこれからも常に検討していく必要がある課題であるとする。

各氏の検討に対する私見を述べてきたが、ヤウンモシリ島の「ユベオツ（続縄文）文化」が本州列島とは異なる独自の文化であることは、捉え方の細部には違いはあるものの、各氏の検討によっても明らかであり、少なくとも研究者間では共通認識は得られているのではないかと考える。また「縄文文化に連続するものの、「ユベオツ（続縄文）文化」はそれとは異なる独自の文化の可能性が高いのではないだろうか」と考えていることも、共有されているように感じる。そうでなければ「縄文文化の「続縄文期」」がもっと積極的に用いられているのではないだろうか。現代のヤウンモシリ島の歴史学・考古学は「ユベオツ（続縄文）文化」について、どのように考えて歴史的・考古学的に位置づけることができるか、歴史として叙述することができるかを模索している段階とも思われる。しかし、私は、現実の社会は未来に向かい常に進んでいくものとするため、研究上でもその社会的な意味からも「問題がある」としながら、これまでも繰り返してきた「問題提起」と「留保」はいつまで続くのだろうかという杞憂から、現時点で定点とできる、考古学としての一定の論を示す必要があると考え、はじめて批判的に考察し、「ユベオツ（続縄文）文化」と「ユベオツ（続縄文）時代」を提示した。しかし、それ以外に他意はないため、今後検討していくことで議論は深まると考える。

私は歴史学の時代区分には「歴史性」が伴うものと理解する。そのために、時には「政治史的」であったりもするし、「生業の継続性」や「社会構造の変化」などが深く問われるのだろう。その意味ではヤウンモシリ島での課題は多く、これからもそれらを明らかにしていく検討が必要である。文化と時代区分については今後も検討していきたいし、対話と議論はこれからも常に必要と考える。

なお、本項の記載は批判的に取り上げている内容が多いことから、私見であり、所属機関を代表するものではなく、組織としての見解を示すものではないことを明記する。

IV. まとめ

ここでは、主に「続縄文時代研究の現在」以降の研究の現状を概観した。ここで示してきたように、続縄文文化・続縄文時代についての研究は、地域を絞って概観しただけでも、この10数年程度で様々な課題の検討が行われ、その理解には多くの進展がみられる。また、各研究者による課題の検討により、さらなる課題も明らかになってきている。さらなる課題については、再述はしないが、引き続き、多様性のある検討と対話、議論を積み重ねていく必要があろう。

南北海道考古学情報交換会のあるヤウンモシリ島の南西部地域では若い年代の研究者も多く、日々の調査と研究の積み重ねが地域的な歴史を考古学的に明らかにしていくことと思ひ、また今後も検討と対

話、議論を進めていただけるようにとの思いから概説を行った。ここでは「ユベオッ（続縄文）時代の概説」を通して、一方では型式学的に、一方では考古学を歴史学の一員と考えることにより、「ユベオッ（続縄文）文化」と「ユベオッ（続縄文）時代」を示し、「擦文文化・擦文時代」と瀬川氏による「ニブタニ文化・ニブタニ時代」とともに歴史叙述のなかに位置付けた。

私は、日本歴史からアイヌの人々の歴史を切り離したり、逆に一地方（辺境・周縁）の文化・歴史（例えば「弥生時代のなかの弥生文化と続縄文文化」など）に留めないために、このような現在の日本で学術的にも一般的にも用いられている、考古学的な「文化」と歴史学における「時代区分」の両方を用いて地域の歴史を考え、「等置して叙述（記述）する」ことにより「政治的な色彩」を克服し、歴史的・考古学的な課題を検討したいと考える。もちろん、これらのことのみで、すべての文化と時代の区分の課題が解決すると考えているわけではなく、私なりの方向性を考古学的に明らかにし、示すことに努めた。それとともに、これからの和人（和民族）とアイヌ（アイヌ民族）の人々との「共生」に関わる現代的な課題について、各研究者や一般社会と共有していきたい。また、このように捉えることにより、今後アイヌの人々自身のアイヌ語による歴史叙述が可能になったときに、それを和語（現在の共通日本語）に翻訳したときの和人の人々自身の言葉を失わないで済むのではないかと考える。私は現在のヤウンモシリ島の考古学界からの「共生」に関わる検討と発言が少ないことに違和感があり、また遺憾に思うことから、私自身の反省を込めて、ここでも取り上げた。

ここでの概説は、私の力量の及ぶ範囲内でのものであり、遺漏と誤読が多いことと思う。また、与えられた主題が大きなものであるため、課題が多岐にわたり、時間的な制約もあることから、私自身が検討しきれないものが多く、冗長になってしまったことはご容赦いただきたい。様々な立場からの忌憚のないご意見とご教示、今後のご検討をいただければ幸いです。

謝辞

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 簗島栄紀氏には文献の入手に際しまして、お手数をおかけし、大変にお世話になりました。記して感謝を申し上げます。現在は鬼籍に入られておられる石本省三氏と千代肇先生と、現在も精力的に研究を進めておられる横山英介氏には、これまでに身に余る多大な学恩を賜って参りました。私の力量不足のために両氏をご存命の時にはかないませんでした。拙いこの講演が少しでも三氏に報いることが出来ていれば、うれしく思います。また、私のような市井の研究者にこのような大きな主題を与えていただき、講演の機会をいただいた南北海道考古学情報交換会の事務局には感謝しかありません。身に余る思いを感じつつ、十分にその責に応えることが出来たかは心許ありませんが、現状での私なりの理解を示したことで、その任を終えたいと思います。

話題提供

現在、東北地域では福島県白河市天王山遺跡の史跡整備を目指している再調査を契機として、弥生時代後期の天王山式とその系統の土器群について、複数により再検討が行われていると伝え聞いています。本年12月20日（日）には弥生時代研究会の第2回オンライン学習会において、青山博樹氏による「天王山式のなりたちを考える（仮）」が予定されています。天王山式とその系統の土器群は東北地域北部・中部からヤウンモシリ島中部地域にかけて広域に分布していることから、研究動向には注視していきたい。また、上条信彦氏による「近年の弘前大の調査から 湯の沢と清水森西」も予定されています。今年は新型コロナウイルス感染症対策により、新たな試みとして各地でオンラインでの講演や学習会などが増えてきており、来年以降もこの傾向は続きそうです。オンラインでは実物資料の実見による検討な

どでは課題も多いかとは思いますが、遠隔地からの参加・視聴が可能な点や、質問や意見などがリアルタイムに反映されるなど、これまでの講演会や学習会などとは異なる良い点も共有していきたい。弥生時代研究会と北海道考古学情報交換会の積極的な取り組みに心から敬意を表します。

註

- 1) 「ヤウンモシリ（北海道）島」の表記については北海道大学先住民・アイヌ研究センター 北原モコットゥナシ氏のご教示による。記して感謝を申し上げます。

引用文献

- 青野友哉 2011 「第二章 隣接地域の諸相と交流 二 続縄文文化と弥生文化」『講座日本の考古学 弥生時代（上）』5 522～545頁 青木書店
- 赤塚次郎 2002 「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』2 33～40頁 小学館
- 厚真町教育委員会 2006 『上幌内モイ遺跡（1）』 乾哲也・小野哲也・奈良智法編
- 石井 淳 1997 「北日本における後北後北C2-D式期の集団様相」『物質文化』第63号 23～35頁 物質文化研究会編
- 石狩市教育委員会 1977 「Wakkaoi III-石狩、ワッカオイ地点D地区における続縄文期の発掘調査-」 直井孝一編
- 浦幌町教育委員会 1974 『十勝太若月-第二次発掘調査-』
- 浦幌町教育委員会 1975 『十勝太若月-第三次発掘調査-』
- 大坂 拓 2007 「恵山式土器の編年」『駿台史学』第130号 53～83頁
- 大坂 拓 2010 「続縄文時代前半期土器群と本州島東北弥生土器の並行関係」『北海道考古学』第46輯 89～104頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2013 「後北式土器再論」『北海道考古学』第49輯 51～68頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2015 「北海道（南部・中央部）」『弥生土器』 447～473頁 佐藤由紀夫編 ニュー・サイエンス社
- 大沼忠春 1982a 「後北式土器」『縄文土器大成 -続縄文』5 127～129頁 講談社
- 大沼忠春 1982b 「道央地方の土器」『縄文文化の研究 続縄・南島文化』6 75～93頁 雄山閣
- 加藤博文 2019 「考古學中的去植民地化：北海道考古學的課題（考古学における脱植民地化：北海道考古学の課題）」『現教界』第88期2019年8月号 85～92頁
- 加藤博文 2020 「アイヌ民族と先住民考古学」『世界と日本の考古学-オリーブの木と赤い大地-』 533～544頁 常本晃先生退職記念論文集編集委員会編 六一書房
- 木村 高 2011 「二 古墳時代の併行期の北方文化 【東北地方の続縄文文化】」『講座日本の考古学 古墳時代（上）』第7巻 710～725頁 広瀬和雄・和田晴吾編 青木書店
- 熊木俊朗 2001 「後北C2・D式土器の展開と地域差-北大式土器の型式編年 -トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位（2）-」『トコロチャシ跡遺跡』 176～217頁 東京大学大学院人文社会系研究科
- 熊木俊朗 2010 「総論-最近の研究動向から-」『北海道考古学』第46輯 1～8頁 北海道考古学会編
- 熊木俊朗 2018 『オホーツク南岸地域古代土器の研究』 北海道出版企画センター
- 工藤研治 2004 「続縄文文化の土器」『考古資料大観 続縄文・オホーツク・擦文文化』11 89～

- (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『長興寺 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団調査報告書第388集 金子昭彦編
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 1998 『北斗市 茂別遺跡』第121集
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2002 『北斗市 西島松5遺跡』第178集
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 2003 『早来町 大町2遺跡』第228集
- 河野広道 1933 (1984年復刻) 「北海道江別町圓形竪穴式墳墓発見の石器時代人-頭骨とその埋葬状態」『人類学雑誌』第48巻第6号 311~315頁 日本人類学会編 第一書房
- 小杉 康 「第12章 列島北東部の考古学」『初めて学ぶ考古学』 263-282頁 有斐閣
- 後藤寿一 1935 (1982年復刻 昭和10年) 「石狩國江別町に於ける竪穴様墳墓について」『考古学雑誌』第25巻第5号 92~71 (298~327) 頁 日本考古学会編 学生社
- 斎藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器」『岩手考古』第5号 1~26頁
- 斎野裕彦 2011 「第1章 弥生文化の地域的様相と発展 十 東北地域」『講座日本の考古学 弥生時代(上)』5 430~482頁 青木書店
- 榊田朋広 2016 『擦文土器の研究』北海道出版企画センター
- 笹田朋孝 2013 『北海道における鉄文化の考古学的研究-鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心として-』北海道出版企画センター
- 札幌市教育委員会 1987 「K135遺跡」『札幌市文化財調査報告』14 上野秀一・加藤邦雄編
- 札幌市教育委員会 1996 「H37遺跡 丘珠空港内」『札幌市文化財調査報告』50 芳賀憲二編
- 佐藤 剛 1998 「北海道出土の「いわゆる赤穴式土器」について」『北方の考古学』 277~286頁 野村崇先生還暦記念論集刊行会
- 佐藤 剛 2000 「北海道」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』第二分冊 1051~1067頁
- 佐藤 剛 2004 「後北C₂・D式土器の時期区分と細分(2)」『北方島文化研究』第2号 1~16頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2007 「続縄文時代の土器研究の現状について」『2007年度北海道考古学会研究大会「続縄文時代研究の現在」資料集』北海道考古学会編 5~7頁
- 佐藤 剛 2011 「続縄文時代初頭の土器群の時期区分について」『北方島文化研究』第9号 1~14頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2020a 「擦文時代のはじまり」『東北太平洋沿岸地域の古代社会』科研費「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」考古部門：古代貝塚・集落グループ総括報告会要旨集 明治大学日本古代学研究所
- 佐藤 剛 2020b 「「接触・緩衝地帯(フロンティア)」(西川 2019)について」『弥生時代の東西交流~広域的な連動性を考える~』考古学リーダー27 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編 六一書房
- 佐藤 剛 n.d.a 「続縄文時代前半期の土器研究の現状について」『靱』10号 弥生時代研究会編
- 佐藤 剛 n.d.b 「ヤウンモシリ島の5~8世紀の社会-中部地域~南西部地域の土器群と建物跡の様相から-」『北杜2』辻秀人先生古希記念論集刊行会編
- 佐藤信行 1990 「天王山式土器の成立と展開-いわゆる交互刺突文の系譜を中心に-」『天王山式期をめぐる検討会記録集』

- 佐藤由紀夫 2016 「磨製石斧の流通からみた紀元前一千年紀の北海道・東北北部」『北方島文化研究』第12号 1～18頁 北方島文化研究会編 北海道出版企画センター
- 佐藤由紀夫 2018 「紀元前一千年紀後半の日本海をめぐる交流と地域社会」『論集 弥生時代の地域社会と交流』転機8号 地域と考古学の会編
- 佐藤由紀夫・赤沼英男・赤石慎三・岩波連 2018 「苫小牧市タプコプ遺跡30号墳墓出土鉄製品のX線撮影報告」『苫小牧市美術館 紀要』第4号 苫小牧市美術館編
- 鈴木公雄 2008 「Ⅲ 土器編年の方法 型式学的方法③」『縄文時代の考古学』2 72～85頁 同成社
- 鈴木 信 1998 「3. I 黒層の土器について」『千歳市 ユカンボシC15遺跡(1)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(以下、北埋調報)第127集 329～339頁
- 鈴木 信 2003 「3 道央部における続縄文土器の編年」『千歳市 ユカンボシC15遺跡(6)』北埋調報第192集 410～452頁
- 鈴木 信 2004 「古代北日本の交易システム-北海道系土器と製鉄遺跡の分布から-」『アイヌ文化の成立』65～97頁 宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編 北海道出版企画センター
- 鈴木 信 2007 「アイヌ文化の成立過程-物質交換と文化変容の相関を視点として」『古代蝦夷からアイヌへ』352～390頁 天野哲也・小野裕子編 吉川弘文館
- 鈴木 信 2009a 「続縄文文化における物質文化転移の構造」『古代における生産と権力とイデオロギー』国立歴史民俗博物館研究報告第152集 401～440頁 国立歴史民俗博物館
- 鈴木 信 2009b 「2日本列島の他文化との比較 ①続縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学 弥生文化の輪郭』第1巻 129～147頁 同成社
- 鈴木 信 2010 「続縄文期における階層差とは-墓制・交易からの検討-」『北海道考古学』第46輯 23～42頁 北海道考古学会編
- 鈴木 信 2011a 「恵山式の終末と後北式のその後-道南出土例を検討して-」『北海道考古学』第47輯 51～69頁 北海道考古学会編
- 鈴木 信 2011b 「二 古墳時代併行期の北方文化 【北海道の続縄文文化】」『講座日本の考古学 古墳時代(上)』第7巻 726～758頁 広瀬和雄・和田晴吾編 青木書店
- 鈴木 信 2018 「江別太式・後北A式の編年」『北海道考古学』第54輯 55～74頁 北海道考古学会編
- 鈴木 信 2019 「帯縄文の発生と拡散」『北海道考古学』第55輯 39～58頁 北海道考古学会編
- 鈴木 信・豊田宏良・仙場伸久 2007 「xi. 北海道南部～中央部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 304～339頁 辻秀人編 平電子印刷所
- 須藤 隆 2000 「弥生時代の東北地方」『宮城考古学』第2号 1～24頁 宮城県考古学会編
- 瀬川拓郎 2007 『アイヌの歴史 海と宝のノマド』 講談社
- 瀬川拓郎 2016 『アイヌと縄文-もうひとつの日本の歴史』 ちくま書房
- 高倉新一朗 1970 「第二編 場所時代」『江別市史』 85～147頁 渡辺茂編
- 高倉 純 2005 「Ⅷ K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点から出土した竪穴住居址の検討」『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書』Ⅱ 108～116頁 小杉康・高倉純・守屋豊人編

- 高倉 純 2010 「北海道の縄文時代晩期から続縄文時代前半にかけての石器群の変遷」『北海道考古学』第46輯 43～58頁 北海道考古学会編
- 高倉 純 2011 「石器から見た縄文から続縄文時代への変容-両面調整石器製作工程の検討を中心に-」『北海道考古学』第47輯 17～32頁 北海道考古学会編
- 高瀬克範 2002 「日本列島北部の擦切技法」『古代文化』第54巻第10号 37～46頁 古代学協会編
- 高瀬克範 2011 「レプリカ法による縄文晩期から弥生・続縄文期の土器圧痕の検討-北海道・宮城県域における事例研究-」『北海道考古学』第47輯 33～50頁 北海道考古学会編
- 高瀬克範 2014 「続縄文文化の資源・土地利用」『農耕社会の成立と展開-弥生時代像の再構築-』国立歴史民俗博物館研究報告第185集
- 高瀬克範 2017 「石狩紅葉山49号遺跡出土剥片石器の使用痕分析」『北海道考古学』第53輯 111～130頁 北海道考古学会編
- 高橋 健 2008 『日本列島における銚漁の考古学的研究』 北海道出版企画センター
- 高橋正勝 1984 「北海道中央部の続縄文文化」『北海道の研究』1 356～384頁 清文堂
- 高橋正勝 2003 「江別文化の成立と発展」『北海道の古代 続縄文・オホーツク文化』2 30～49頁 北海道新聞社
- 田村すず子 1996 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
- チャイルド, V.G. 1956 (近藤義郎訳1964) 『考古学の方法』 (新装版1994) 河出書房新社
(V . G . C h i l d 1 9 5 6 P i e c i n g T o g e t h e r t h e P a s t , R o u t l e d g e L t d)
- 辻 秀人 2005 「土器研究の方法」『東北学院大学論集-歴史学・地理学-』第39号 1～32頁
- 苫小牧市教育委員会 1984 『タマコブ』
- 名取武光 1933 「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」『考古学雑誌』第23巻第11号 27-44) 715～732
- 藤本 強 1988 『もう二つの日本文化』 東京大学出版会
- 名取武光 1933 (1981復刻 昭和8年) 「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」『考古学雑誌』第23巻第11号 27～44 (715～732) 頁 日本考古学会編 学生社
- 西川修一 2018 「三浦半島と相模湾岸の海洋民系文化について」『研究紀要』第6号 59～69頁 横須賀考古学会編
- 福井淳一 2014 「オホーツク文化の石錘」『北方島文化研究』第11号 1～22頁 北方島文化研究会編 北海道出版企画センター
- 福井淳一 2018 「北日本弥生文化・続縄文文化前半の骨角器」『考古学ジャーナル』No.710 ニュー・サイエンス社
- 福井淳一 2019a 「漁撈具にみる弥生・続縄文文化の交流」『第1回物流・交流の考古学的研究集会 レジュメ』 1～10頁 (会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館)
- 福井淳一 2019b 「北海道出土の骨角製針について」『歴史・民俗・考古学論攷』Ⅲ 大阪・郵政考古学会
- 福井淳一 2019c 「北海道のサケ利用」『カムバック・サーモン -北のサケ・マス、南のアユ・ウグイ-』海洋考古学会第10回研究会資料集 15～24頁 海洋考古学会編
- 藤沢 敦 2018 「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 447～486頁

- 藤原秀樹 2019 「北海道における縄文・続縄文時代の子供の埋葬」『北海道考古学』第55輯 1～20頁 北海道考古学会編
- 北海道考古学会研究会担当 2008 「2007年度研究大会内容について」『北海道考古学』第44輯 59～62頁 北海道考古学会編
- 北海道考古学会研究会担当 2009 「2008年 北海道考古学会研究大会記事「続縄文文化とは何か」」『北海道考古学』第45輯 99～104頁 北海道考古学会編
- 北海道考古学会編 2007 『続縄文時代研究の現在』2007年北海道考古学会研究大会資料集
- 北海道考古学会編 2008 『続縄文文化とは何か』2008年北海道考古学会研究大会資料集
- 北海道考古学会編 2010 「特集「続縄文文化の特色」」『北海道考古学』第46集 1～88頁
- 北海道立埋蔵文化財センター 2005 『恵山貝塚Ⅱ』 金子浩昌・志賀健司・西脇対名夫・花岡正光・立川トマス・菊池慈人・土肥研晶・藤井浩・田中哲郎編著
- 松木武彦 2007 「階層」『列島創世記』1 25～30頁 小学館
- 松田宏介 2005 「日高地方東部における続縄文期の土器様相-えりも町東歌別遺跡出土土器群の検討から-」『北海道考古学』第41輯 1～20頁
- 松田宏介 2006 「続縄文期における日高地方在地土器群の系譜-浦河町白泉遺跡10号ピット出土資料の位置づけ-」『北海道考古学』第42輯 61～74頁
- 松田宏介 2010 「集落・社会論にみる続縄文研究の枠組み」『北海道考古学』第46輯 75～88頁 北海道考古学編
- 松田宏介 2014 「特集：北海道考古学の回顧と展望 続縄文時代」『北海道考古学』第50輯 75～85頁 北海道考古学会編
- 森田知忠 1967 「北海道の続縄文文化」『古代文化』第19巻第2号 39～50頁 古代学協会編
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 29～32頁（1967 先史考古学論文集第一冊 45～48頁）
- 山内清男 1939 「Ⅳ 縄紋式以後」『日本遠古之文化』 23～48頁
- 横山浩一 1985 「3 型式論」『岩波講座 日本の考古学 研究の方法』1 43～78頁 岩波書店
- 吉崎昌一 1982 「5 下添山遺跡」『北海道における農耕の起源（予報）-文部省科学研究費による-』 4～12頁 梅原達治（研究代表者）編
- 山田康弘 2010 「縄文時代における階層性と社会構造-研究史的理解と現状-」『考古学研究』第57巻第2号 6～21頁 考古学研究会
- 山田康弘 2014 『老人と子供の考古学』 吉川弘文館
- Clarke, D.L. 1968 *Analytical Archaeology*, Methuen.